

◎大行ハ細謹を顧みず

史記の項羽本紀に、樊噲曰、大行不顧細謹、大禮不辭小讓、言ふことゝるの大事を行へんと欲する者ハ少しの謹み杯の顧みざる也、大禮を行ふ時の少しの禮義の缺くとも先づ大禮を遂る様とする也。

◎大富人と長者と云ふ

大は富める人を長者と云ふ。諺草に、諸國長者屋敷の址あり、是れ有富農、大賈の徒の居たりし宅址あり。神相全編に曰く、手仇如三瓶瓦、必作大富長者。

◎耐久之友

友誼の久しきは耐るを云ふ。書言故事に曰く、魏玄同與裴炎締交、能保始終、時人呼爲耐久之友、保全交道、始終不移其心。

◎檀那

主君を稱して檀那と云ひ、世主と云ふ。又僧家に施主を稱して檀那と云ふ。善覺要覽に曰く、梵語陀鉢底、唐言施主、稱檀那者即訛陀爲

檀、去鉢底曰檀那。諺草に、今俗は主君の事を檀那といふも、世主といふ意より起れるよや、始めの主君を檀那といふ事いまいし事にせしが、今の習て俗とされり、然れ共心ある人の云ひまじき事也」とあり。大乘論に曰く、能破慳慳、恡嫉妬及貧窮下賤苦、故稱陀、後得大富、及能引福德資糧、故稱那、又稱檀越者、檀即施也、此人行施越貧窮海。法界次第に曰く、泰曰布施、施有二種、一者財施、二者法施。

◎桃李門に在り

弟子の多きを稱して桃李門に在りと云ふ。成語考に曰く、桃李在公門、稱人之弟子之多也。唐書に、武后問狄仁傑曰、朕欲得一佳士、卿知誰可者、仁傑曰、張柬之、張柬之雖老、寄相才也、因用爲相、又常薦待郎姚崇、監察御史桓彥範、大平州刺史敬暉等、卒爲名臣、或謂仁傑曰、天下桃李盡在公門、傑曰、薦賢爲國、非爲私也。

◎多々益善し

多事を處理する才幹を稱して云ふ事なり。史記の淮陰侯の傳に曰く、上問

曰、如我能將幾何、信曰、不過能將三十萬、上曰、於君何如、曰臣多々而益善耳。少兵素より之が將たるを得べし、假令多々益加ふるも能く之が將となりて、其兵を遣ふ。成語考よ、韓信將兵多々益善。

◎盜賊の門に義存せり

莊子の盜跖篇に曰く、滿苟得曰、小盜者拘、大盜者爲、諸侯、諸侯之門、義士存焉、昔者植公小白、殺兄入嫂而管仲爲臣、田成子常殺君竊國、而孔子受幣、論則賤之、行則下之、則是言行之情、倅戰於胸中一也、不亦拂乎。史記の游侠傳に曰く、跖驕暴戾、其徒誦義無窮、由是觀之、竊鉤者誅、竊國者侯、侯之門仁義存。又莊子の法法篇に曰く、跖之徒問於跖曰、盜亦有道乎、跖曰、何適而無有道邪、夫妄意室中之藏、聖也、入先勇也、出後義也、知可否智也、分均仁也、五者不備而能成大盜者、天下未之有也。

◎桃李言ざれども下自ら蹊を成す

徳ある人の言のすして人自ら歸服する喻あり。蹊の徑道なり、桃李の花を慕ふて招かざるよ人争ふて來往するが故に、其下自然に徑を成す、故よ人誠信の心あらば招かずして歸服するなり。史記の李廣傳よ、太史公曰く、傳曰其身正、不令而行、其身不正、雖令不從、其李將軍之謂也、余睹李將軍、悛悛如鄙人、口不能道辭、及死之日、天下知與不知、皆爲盡哀、彼其忠實心、誠信於士大夫也、諺曰、桃李不言、下自成蹊、此言雖小、可以喻大也。

◎大膽

勇氣の勝ちたる者を稱して大膽者と云ふ。千金方孫思邈曰く、心欲小膽、靈樞の論勇篇に曰く、勇士者、其肝大以堅、其膽滿以在傍。

◎達者

能く理に達したる者を云ふ。文撰に、阮元瑜爲曹公、與孫權書曰、達者所規、規於未兆、註よ、向曰、達謂達理者。仲長紆が樂志論、與達者數子、論道講書。諺草に、今俗よ人の健なるを達者といふの意義ちがへり。

◎直人

尋常の人に勝れたるを云ふ。詩經の定之方中篇に曰く、匪直也人。源氏若葉の卷に、たゞ人の中にハ有がたし。

◎當路之人

たもたらたるやくにん。

要地に居る人、即ち國務大臣等を云ふ。孟子に公孫丑問曰、夫子當路於齊、管仲晏子之功、可復許乎。

人事身體

◎寶の山より入りて手を空くして歸る

蔡虛齊が四書蒙引に曰く、所謂入寶山空手而回者也。又曰、徒勞徒死無一可得、如入寶山空手而歸。一も得る所なく徒勞は屬するに喩ふなり。

◎薪を抱ひて火を救ふ

火を以て火を救ひ、水を以て水を救ふの、其過ちを救ひんと欲して反つて其

過ひを増すとの喩なり。例へば惡心ある者が惡人と交際すれば、其惡意愈々増長するが如きを云ふ。漢書の董仲舒傳に曰く、如以湯止沸以薪救火、愈甚亡益也。史記の魏世家に曰く、魏氏地不盡、則不知己、且夫以地事秦、譬猶抱薪救火、火不滅。通鑑に、以血洗血、汚益甚耳。韓非子に曰く、以肉去蟻蟻愈多、以魚驅蠅愈至。

◎螳螂が斧を以て隆車に向ふ

己れが分際を知らずして、弱き者が強き者に勝たんとするに喩ふ。淮南子の人間訓に曰く、齊莊公出獵、有螳螂負足將搏其輪、問其御曰、此何蟲也、對曰、此所謂螳螂者也、其爲蟲也、知進而不知却、不量力而輕敵、莊公曰、此爲人而必爲天下之勇武一矣、廻車而避之。文選に、欲以螳螂之斧禦隆車之隱、註に前有二而足、舉之如執斧之象。成語考に曰く、勢弱難適、謂之螳臂當車。莊子の天地篇に、季徹局局然笑曰、若夫子之言、於帝王之德、猶螳螂之怒、臂以當車轍、則必不勝任。

◎大物ははつり取れ

功を積み久しきを経て、成就すべし、速に成り難しと云はん爲めに大なる物
少しつゝはつり取れと云ふ義あり。書曰く、泰山雷穿石、彈極之綆斷
幹、水非石之鑽、索非木之鋸、漸靡使之然也。

○鷹ハ死ぬれど穂をつまざ

義を守る武士の假令飢及ぶと雖も、不義の俸禄を受すと云ふ義なり。李
白が詩に、鳳飢不啄粟、所食唯琅玕、焉能與群鷄、刺促爭一餐。

○掌を反すよりも易し

物の變更するは容易なる事の喩なり。古書曰く、爲さんと欲する所を變
んこと、掌を反すよりも易し。

○鷹を養ふが如し

成語考に、養ニ惡人ニ如シ、養レ虎、當ニ飽ニ其肉、不飽則噬、養ニ惡人ニ如シ、養レ鷹、
飢ニ之則附、飽ニ之則颺。綱鑑の漢獻帝紀に、養ニ將軍ニ如シ、養レ虎、當ニ飽ニ其肉、
不飽則噬之、公曰、不然、譬如養鷹、鷹飢則爲用飽則颺去。

○頼む木の下は雨洩る

諺草は、大平記に曰く、主上笠置を御没落の時、棺を拂ふ松の風を、雨のふる
かと聞しめして木の陰に立寄りせ給ふたれば、下露のはらくと御袖にか
かりけるを、主上御覽せられて、「さして行笠置の山を出しより天か下に隠
れ家もなし」藤房公涙を押へて、「いかよせん頼む陰とて立よれば猶袖ぬらす
松の下露」。世諺よく之に似たり。

○大樹の下は美草あり

説苑の説叢篇に曰く、高山の巔に美木無し、多陽は傷けらるればなり、大
樹の下に美草無し、多陰は傷けらるればなり。

○談藪 談柄

書言故事曰く、人の談論の竭ざるを稱して談藪と爲す。晋書に樂廣嘗與
顔清言、欲以理服之、而顔辭語豐博、廣笑不言、時人謂顔爲言談之林
藪。傳燈錄に、大明法師、每談論、手執松枝、以爲談柄。

○簞瓢自樂しむ

論語雍也篇、子曰賢哉回也、一簞食一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。簞の竹にて造り食を入れる器なり、瓢の瓢なり、顔回の貧は處て其樂を改めず、故に貧窮に居て其心は憂と爲さず、自ら樂しむことに用ゆ。

○玉とかりて碎くも瓦とかりて全き事勿れ

節義の士となりて身を果ることあるも不忠不義の者となりて生命を全ふる勿れと云ふ義なり。三國志の魏宗室景皓曰く、大丈夫寧爲玉碎、不爲瓦全。

○泰山頽れ梁木壞る

頼みとしたる人の死に用ゆ、禮記檀弓曰く、孔子蚤作負手曳杖消遙於門、歌曰、泰山其頽乎、梁木夫壞乎、哲人其萎乎。泰山の衆山の仰ぐ所なり、而して頽れ、梁木の衆木の仰ぐ所、而して壞る、哲人も亦衆人の仰望せらるる者なり、而して萎む、皆其所を失ふを云ふ、故に頼みとして仰ぎし人の

死杯に用ゆべし。

○大造

左傳曰呂相曰く、我有大造于西也、杜豫曰造成也。文撰の陳孔璋檄文曰く、有大造於操、註曰、造恩也、有大恩、謂救之。諺草は今俗に人の恵を受けて大造の事といふ、大恩の意なるべし、又物の大なるを云ふ時の大壯の字ならん、大壯の易の卦の名なり。

○他界

人の死を他界と云ふ。東鑑十五に曰く、稻毛三郎重成妻、於武藏國他界。

○謔言

字彙に、謔多言也。諺草に、謔書多く記せり、たわごと、訓するの多言なるべし。

○膽斗

物の多き事を膽斗と云ふ。蜀志に曰く、世語曰、維死時、見割膽如斗大。

蒙求、姜維膽一斗。諺草に、今俗に物の多き事を膽斗と云ふ、大なる事をいはし可からん。

◎大膽

勇氣の勝ちたる者を大膽者と云ふ。靈樞の論勇篇に曰く、勇士者其肝大以堅、其膽滿以傍、又千金方、孫思邈が曰く、心欲小、膽欲大。

◎斃而后已

事は勉むるは斃るまで怠らざるを云ふ。禮の表記に曰く、忘身之老也、不知年數之不足也、俛焉日有孳孳、斃而后已、註よ、俛焉無願、他意也、孳孳勤勉貌、斃死也。

◎道旁の苦李

書言故事に曰く、人の爲めは棄らるるは、道旁の苦李の如し。事類全書に曰く、王、我年七歳、嘗與諸小兒遊、賭道邊李、樹有子折枝、諸小兒競走取之、惟我不動、人問之、答曰、樹在道邊而多子、此必苦李也、取之信然。斷絃之悲

知己の亡ぶるを嘆するよ云ふ。呂氏春秋に曰く、鍾子期死、伯牙破琴絕絃終身不復鼓琴、以爲無足爲鼓者。列子に、伯牙喜琴、鐘子期善聽云云。

◎足を知る

足を知らずして有るが上に猶ほ其上を望む、今人の望む所なり、然れども古人の足を知るは第一の富としたり、遺教經に曰く、不知足者、雖富而貧。説苑に曰く、富在知足、貴在求退。

◎樂、哀のものとひ

漢の武帝の秋風の辞に曰く、歡樂極兮哀情多。文中子に曰く、易、樂者必多哀。曲禮に曰く、敖不可長、欲不可縱、志不可滿、樂不可極、註よ、應氏曰、敬反爲敖、情動爲欲、志滿則溢、樂極則反。史記の滑稽列傳に曰く、酒極則亂、樂極則悲。

◎大功を爲す者ハ衆ヲ謀ラズ

戰國策に、肥義曰く、臣聞之、疑事無功、疑行無名、夫論至德者、不和

於俗成三大功者、不謀於衆。

◎大厦の顛れとす一木の支ふ所も非也

國家の衰運に赴くとき、一忠臣の得て支へ難きを云ふ。宋書に袁粲與劉秉謀誅蕭道成、褚淵知之、以告道成、遂使戰僧攻粲、粲謂其子最曰、本知一木不能支大厦之崩、但以名義至此、僧靜除城獨進、最以身衛粲、粲謂最曰、我不失忠臣、汝不失孝子、父子俱死、百姓哀之、謠曰、寧爲袁粲死、不作褚淵生、秉父子亦被殺。

◎蛇足

餘計の事を爲すと云ふ。史記の楚世家に曰く、又移兵而攻齊、攻齊勝之、官爵不加於此、攻之不勝、身死爵奪、有毀於楚、此爲蛇爲足之說也。成語考に曰く、無中生有曰畫蛇添足。

◎大椿之壽

八千代の玉椿として、八千歳の壽を云ふ。書言故事に曰く、上壽曰仰祝、大椿之壽。莊子の逍遙遊篇に、上古有大椿者、以八千歳爲春、八千歳爲

秋、云云。

◎大海の塵と擇まざ

戰國策に曰く、大山不讓土壤、故能成其大、河海不擇細流、故能就其深。

◎立鳥跡と汚さざ

後事を大切にすることを云ふ。史記に、樂毅が曰く、古之君子、交絶不出惡聲、忠臣去國不潔其名。

◎蓼くふむし

物に馴染るゝ喩ふ。俗に蓼喰ふ虫もすさゝくと云ふ事あり。五車韻瑞に曰く、孔叢子、有蓼蟲、言是蟲幼長、斯蓼不以為辛。晋左思が魏都賦に、蓼蟲忘辛。白氏文集自詠詩に曰く、何異食蓼蟲、不知苦是苦。

◎退屈 退轉

圓覺經曰く、無^レ令^ル惡^ム魔^ル及^ヒ諸^ノ外^ノ道^ヲ惱^ス其^ノ身^ノ心^ヲ令^シ生^ジ退^屈。涅槃經に曰く、心無^ク退^轉、即^チ便^チ前^進。又圓覺經に曰く、晨^ニ夕^ニ守^テ護^シ、令^シ不^レ退^轉。此^ノ字^ハ爰^ニ本^ズク^也。

◎大半 大抵

史記の項羽記の註に、韋^昭曰く凡^ソ數^三分^有一^ニ爲^ス大^半、一^ニ爲^ス少^半。史記の莊子傳の註に、索^隱曰く、大^抵猶^言大^略也。史記の秦本紀の註に、猶^略也。

◎無^二旦暮^一

家を治るよ、儉素を守らざるものを、ためなしと云ふ。諺草に曰く、旦^も暮^もを計らず、暮に旦を勘る事なき、愚なる者の甚しき也。又且^暮勘^と云ふも是より出る詞あり。

◎墮落

稍^や落るをだらくと云ふ。諺草に、既^も落るを墮^離と云ひ、又^とるると

る、とろり杯云ふも舌音相ひ通ずるより轉じ來る。

◎慥

萬葉集の訓にあり。中庸章句に慥々篤實貌。言行相顧り見て、正しく、誠あるを慥々と云ふ。

文學技藝

◎他の弓を挽く莫れ

無益の事をすなと云ふ喩あり。古書に曰く、他の弓を挽く莫れ、他の馬を騎る莫れ、他の非を辨ずる莫れ、他の事を知る莫れ。

◎陶冶

陶冶とい物を成就せしむるの謂なり。類書纂要曰く、陶冶ハ猶^ハ人^ノ材^ヲを成就するが如きなり。楊子法言に曰く、或^ハ問^フ世^ニ言^フ鑄^ル金^ノ、金^可鑄^歟曰^ク吾^レ聞^ク、觀^ル君子^者、問^フ鑄^ル人^不問^フ鑄^ル金[、]或^曰、人^可鑄^歟曰^ク、孔子鑄^ル顔淵^也矣。

◎題跋

文體明辯曰く、按ずるは題跋の、簡編の後語也、凡そ經傳子史詩文圖書の類、前より序引あり、後より後引あり、盡せりと謂ふべし、其後覽るもの或人の請求に因り、或の感に因り而して得るあれは、則ち復た詞を撰んで、以て末簡より綴り而して之を題跋と謂ふ、其實を綜るに至りては、則ち四有り、一に曰く題、二は曰く跋、三は曰く書、某、四は曰く讀、某、夫れ題の締也、其義を審締する也、跋の本也、文に因りて本を見ず也、書の其語を書き、讀の讀むに因る也、題讀の唐より始まり、跋書の宋に起る、題跋と云ふの類を擧げて以て之を該る也、其詞古を考へて今を證す、疑を釋さ、謬を訂して、善を褒し、惡を貶し法を立て、誠を垂る、各々爲めにする所有りて、而して専ら簡勁を以て主となす、故より序引と同じからず、又題辭有り、其書の本末を題號する所以にして、指義文辭の表也、漢の趙岐が孟子の題辭を作るが如き、其文稍や煩ひし、宋の朱子之は做ふて、小學題辭を作りて、更より韻語を爲す、然れども題跋の後に書して、題辭の前より冠す、此れ又其辭也。

◎朶雲 てがみ。

人より來りし書翰を云ふ。事類全書より曰く、唐章陟常以五朶朶爲書記、使侍妾主之、其讀答受意而已、皆有楷法、陟唯署名、自謂所書陟字、若五朶朶、時人慕之、號之朶朶公五朶朶。

◎鍛鍊

前漢書より路温舒上疏曰く、鍛鍊而周内之。後漢書の章彪傳より曰く、鍛鍊之吏、註より鍛鍊の猶は成熟の如き也、猶は工治陶鑄鍛鍊し之をして成熟せしむるが如き也。

◎丹青 だみ。

畫彩を施すを丹青と云ふ。普書より曰く、顧愷之字長康、尤善丹青、圖寫特妙。成語考に、繪畫之輩曰丹青。

◎刀圭と業とす

醫業を刀圭の業と稱す。刀圭との藥匙にして分量のことに云ふ。本艸綱目より曰く、刀圭十分方寸匕、一準如梧桐子大一也。神仙傳より、沈義學道。

於蜀一老一君、使一玉女持一金一案玉一杯一盛一藥腸上義、曰、此是神一丹、飲者不死、夫婦各一刀圭云云。

器財雜具

道具

釋氏要覽曰く、中河含一經所、蓄物可一資一、身進一、道者也、則是增一長善法一之具。臨濟錄に、是你屋裏家一具子。

帶佩

身一佩るものハ皆帶佩と云ふ。諺草に、倭俗太刀、刀を常一帯一、帶一、帶るゆへ太刀、刀の恰好を帶佩と稱す。

大將の六具

大將の六具とい、鎧。太刀。采幣。鞭。團扇。扇を云ふ。

草木花實

竹と君子と稱し又此君と云ふ

成語考に曰く、竹稱一君子一、即有ニ斐君子意。詩の籟風に、綠竹猗猗、有ニ斐君子。世説よ、王子一猷常一、暫一寄一人空宅一住、便令種一竹、或問、暫住何煩爾、王嘯一詠良久、直指一竹曰、何可一三日無一此君一。

通用雜錄

淫氣

諺草よ色よ、耽りてハ恥を知らず、成行ハ、俗に、おろかに淺ましさを淫氣と云ふ。

斷絶

史記の蘇秦傳に出たり。李白が詩に、寄一君一、鄧中歌、曲罷心斷絶。

大早計

早く合点するを云ふ。莊子の齊物論に曰く、汝亦太早一計、見一卵一而求一、時夜一、見一彈一而求一、鵝一、言ハ、鷄の卵を見て直一、時を報せんことを求め、彈を

見ての直ちよく鴉あひかりの炙あひかりを求むるの早く合点して之を求めんと欲することあり。

◎蕩滌

唐の會要に曰く、宰相王濬曰く、臣宰相の長を辱ふして、朝に在つて陛下の憂を分つよ足らず、願くハ自ら諸軍を率ゐて、群寇を蕩滌せんと、朝議之を然りとす。史記の樂書に曰く、蕩滌邪穢、斟酌飽滿、以飾厥性。

◎唐突

いさなり。

類書纂要に曰く、唐突ハ不遜也、觸犯するを云ふ。書言故事に曰く、觸スル犯チ

好人ハ曰フ唐突西施。

◎大同

莊子の在宥篇に曰く、頌論形軀合乎大同、大同而無己。又天地篇に曰く、不同同之、之謂大。

◎對面

後漢書の蔡邕傳に、相見無期、惟是書疏、可ニ以對面。

れ之部

天地時令

◎靈辰

人日

正月七日を靈辰と云ひ、又人日といふ。類書纂要に曰く、靈辰ハ人日也、人の萬物の靈たり、故に靈辰と云ふ。成語考よ、人日は初七靈辰、註に、正月元日爲雞、二日狗、三日猪、四日羊、五日牛、六日馬、七日人、人爲萬物之靈、故以是日爲靈辰。

◎黎明

味爽

共によわけ。

成語考よ曰く、黎明味爽皆將曙之時也、註に、黎明味爽皆黑也、爽明也、曙曉也、天方明也。

人倫人品

令

三略に曰く、出君下臣名曰命、施於竹帛一名曰令、奉行之名曰政。

廉直

後漢書曰く、嚴彭祖、爲大傅、廉直不事權貴。

麗澤之契

文學を以て交りを結ぶを云ふ。易の說卦麗澤兌、君子以朋友講習。

人事身體

囹圄

書言故事曰く、人の獄に在るを言て、囹圄の中に在りと云ふ。爾雅曰

く、囹圄也。圜禦也。鎮録囚徒禁禦也。風俗通に曰く、夏曰夏臺、商曰羑

里、周曰囹圄。

零落

楚辭の離騷曰く、惟草木之零落兮、朱子の註、草を零と曰ひ、木を落と曰

ふ、零落の皆墮也。琵琶行に、門前零落鞍馬稀。元遺山が詩、常教零落

在蒿萊。諺草に、俗人の零落ふる、事を零落すると云ふ、又人の死しぬ

るをも零落と云ふ。白樂天の詩に、舊友零落半歸泉。

遼來

魏志に曰く、張遼字文遠、鴈門馬邑人、武力過人、數有戰功、累轉前將

軍。蒙求の舊註曰く、江東小兒啼啼之、白遼來遼來無不止者。諺

草、日本にも此言傳りて、小兒を怖すかすに遼來くと云來れり。

聊爾

聊爾とのかりとめに爲すを云ふ。聊の且略の辞なり、爾は助字あり。山

谷の詩に、且然聊爾耳。薛文清五友の詩に、緝香聊爾意徘徊。諺草

土佐日記に、いさかななる事をゑせどあり、今いふ聊爾の意也とあり。

歴歴

一々數へあぐべき事を歴歴と云ふ。韻會、爾雅の註に、歴歴數也。楞嚴

經に、此歴一歴一地理者。臨濟録よ、是你目前歴一歴一底。

◎領掌

承け司とるを云ふ。又領承とも書く。字彙よ、領統理也。承上令下謂之領。

文學技藝

◎禮樂

禮記の樂記よ曰く、禮者殊事合敬者也、樂者異文合愛者也。又曰く、樂者天地之和也、禮者天地之序也、和故百物皆化、序故群物皆別、樂由天作、禮以地制。孝經よ曰く、移風易俗、莫善於樂、安上治民、莫善於禮、禮敬而已矣。王安石の莊周論よ曰く詩以道志、書以道事、禮以道行、樂以道和云々。禮樂の意義甚だ廣汎あり、容易に盡す可き非ず、故に唯々其一斑を擧げたるに過ぎず。

◎麗藻

藻ハ文詞也、麗藻といハ文章を稱贊する義なり。文撰に、喜麗藻之彬彬。

器財雜具

◎連城之壁

成語考よ曰く、惠王之珠光能照乘、和氏之璧價重連城。史記よ、魏惠王曰、寡人有徑寸之珠、照車前各十二乘者十枚、齊王曰、吾有四臣、將照千金。又曰く、趙惠王、得楚和氏璧、秦昭王、請下以十五城易之、藺相如捧璧入秦、見秦王無償、城意欲與、璧碎、秦王恐破玉、不敢加罪、相如遂完璧而歸趙。

草木花實

◎蓮ハ花中の君子

成語考に曰く、蓮乃花中君子、周濂溪先生、極愛蓮、稱蓮爲花中君子、言蓮如君子清芬粹美也。

器財雜具 草木花實 雜之部

そぞ之部

天地時令

粟散邊土

小國を云ふ。楞嚴經よ、會解温陵が曰く、粟散の即ち小國の小主、天下に散すること粟の多きが如し。

村落

人の家を占めて聚り居る所を村落と云ふ。字彙よ、落は絡也、家屋の連絡するを云ふあり。世説に、逆旅、嫗曰、此東數十里無村落、止有山陽王家墓耳。

人倫人品

續絃

再び娶るを云ふ。書言故事よ曰く、再び娶るを續絃と云ふ。十州記。鳳麟洲、以鳳喙鱗角作膠名續絃膠、能續斷絃。

總角之好

書言故事よ曰く、孫策曰、公瑾與孤有總角之好、註に、孫策は孫權の兄也、公瑾は周瑜の字也、總角の髮を收めて之を結び、以て裝飾を爲す、男子未だ冠せざるの時を云ふ。

損友 益友

論語よ、孔子曰、無友不如己者、註に、己に如かざる時の則ち益無くして損あり。又曰く、益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益矣、友便辟、友善柔、友便佞、損矣、註に直を友とするとき、則ち其過ちを聞く、諒を友とするとき、則ち誠に進む、多聞を友とするとき、則ち明に進む、便の習熟なり、便辟の威儀に習ふて直ならざるを謂ふ、善柔の媚説は工にして諒ならざるを謂ふ、便佞の口語に習ふて聞見の實無きを謂ふ、三つの者、損益正は相反する也。

◎聰明睿智

七書の太宗問の直解曰く、聰明睿智の、聖四徳也。聰は是れ聞かざる所無し、明は是れ見ざる所無し、睿は是れ通せざる所なし、智は是れ知らざる所無し、變化不測之を神と謂ふ、禍亂を戡定する之を武と謂ふ。易の繫辭上傳曰く、古之聰明睿智神武不殺者夫。

◎總領

靖子の事を總領と云ふ。群子弟を總領する意なり。詩經丞民篇の註に曰く、外則總領諸侯、内則輔養君徳。

◎孫

孫とい其人の苗裔と云ふ事なり。諺草よ、其人の孫と、俗にいへり、管に子の子を云ふも非らず、遠孫の事也、按ずるに、左傳哀公十五年の傳よ、子周公之孫也、とあり是れ公孫成を指して云ふ、公孫成の周公の孫に非らず、遠孫と云ふ事あれば、俗語據なきにあらず。

◎宗匠

其藝の達人を宗匠と云ふ。宋の會安曰く、慶曆二年、富弼上言、南省主文者四五人、皆兩制宗匠。

◎蘇民將來子孫

神代直指抄に、神代外縁を引て曰く、素盞鳴尊、根の國に降り給ふ時、雨に逢ひ、風は吹れ、辛苦甚し、依りて宿を諸神にかり給へとも、諸神許されず、時よみたはの國の、蘇民將來、巨旦將來と云へる兄弟の者あり、蘇民の家貧しけれども、心情愛惠あり、巨旦の家富けれども、心情不仁なり、素盞鳴尊先づ宿を巨旦よかり給へり、巨旦かし奉らず、蘇民にかり給ひしかば、かし奉りぬ、且又奉養養饗、奔涯分の及ぶ所を盡せり、素盞鳴尊いたう悦びおはしまし、如何にしてか恩を謝せんと思しめす、其夜おさわの國より、暴疫鬼來りて國民を亡さんとす、尊豫じめ其事を悉くしめして、蘇民よ告て宣く、此夜此處に惡神來るべし、ふれんもの亡敗すべし、我れ其禍を除く方知れり、汝等及び家の内の者等、苜輪を帶べし、然らば、禍も染着すること能わじ、蘇民命に隨ふ、其夜果して暴風通りぬ、明旦所の人民盡く病腦して、或

の死、或の病、尊蘇民に告て宣く、後世疫氣流行せん時、汝が子孫も家門
に懸して、蘇民將來子孫宿と書し、且菲の輪を門楣にかくべし、然らば疫氣
のわざわひを免かるべし。」と、諺草よ、今俗に門楣に蘇民將來子孫處と書
きたる符章を掲ぐるは此故事より出しきり。

◎争臣口と杜つ

漢書よ曰く、佞人用事争臣杜口、佞人の性、心邪佞辯にして是を非と言
なす者なり、然るを僥倖にして君寵を承け權柄を握つて政事に干預すると
さへ、賢智ある争臣も口を杜て言ひざるなり、宜なる哉君不明にして人を
知らず、佞臣の言を用ゐるにより、忠節の言却つて身の害を招くに至るべけれ
ば口を杜て言わす。

◎騷人 しじん。

詩人を云ふ。又騷客とも云ふ。騷は屈原の作れる離騷の騷なり、而して
變体とす、是より世の文人及び文詞を以て騷と名づけしより起る。成語考
よ曰く騷客即是詩人。

◎楚の材晋に用らる

我に用ゆる能わすして却て他に用ゐらるるを云ふ。左傳よ、聲子曰、晋卿
不如楚、其大夫則賢、皆卿材也、如杞梓皮革、自楚往也、雖楚有材、
晋實用之。又唐詩に、知下遂征南、冠楚材。楚の國多く材を出す、故よ
楚材と云ふ。

◎其腸皆錦繡かり

才藻の富麗なるを喻ふ。唐書李白傳に、錦心繡腸云云。

人事身體

◎素封之富

金満家を素封と云ふ。素封の富とい祿もなく、爵邑もなく其富、爵祿を有
つものと同じあるを云ふ。史記の貨殖傳よ曰く有無秣祿之奉、爵邑之
入、而樂與之比者、命曰素封、註よ、素隱よ曰く、素の空也。

◎作麼生 さん。

作麼生ハ猶如何と言ふが如し、支那の俗語あり。傳燈錄に曰く、香嚴謂衆曰、如下人在三千尺懸崖、口銜一樹枝、脚無所踏、手無所攀、忽有人問如何是西來意、若開口答則喪身失命、若不答、又違他所問、當作麼時、且作麼生。又曰、祖問、什麼處來、曰、嵩山來、祖曰、什麼物恁麼來。

◎其奴

下賤の詞に、人を賤め稱して、そやつ、さやつ杯云ふ。源氏玉かつらの巻よすやつばら」とあり。枕草子に、かやつ」と書けり。宇治拾遺に、くやつ」といへる皆同じ詞也其奴つは、其奴といふより轉じたる語あり。

◎其故

是も下賤の者等が賤しき詞よ、その故と云ふ事を、そのけと云ふ。日本紀よ、故の字を、かれと訓す、故曰と書きて、かれよいとくことよめり、かれの二字を反せば、けの字となる、然れハ其けとは、その故といふ事あり、源氏物語よも、故をけといへり。

◎背向

すぢかひの意なり。萬葉集に、つくひねのそがひよ見ゆるあしを山」と讀めり。

◎祖道之宴

書言故事よ曰く、遠行者を餞するを、行軒を祖餞すと曰ふ。漢の疏よ曰く、祖道送行之際、因饗飲、昔黃帝子累祖、好遠遊、死於道、人以為行神。風俗通よ曰く、祖祖也、今人謂餞行曰祖道。成語考に曰く、携酒送行曰祖餞。

◎粗末

藥を制するよ、麤末、細末の法あり、是より起りて事の精細あらざるを粗末と云ふ。

◎某

祖庭事苑に曰く、某如甘在木上、指其實也、然猶未足以定其名。諺草よ、某と云ふ字の、いまだ主の名を知らざるものと、其名を現し難きものとの類皆用ふべし、今の俗或ハ自稱して某と云ふ。禮記よ、孝王某、孔安

一國が註よ、某名也、臣諱君故曰某、凡不知名者皆曰某。又後人其名を重んじて、其名を稱せずして某と書替たるもの往々あり自ら某と稱するよの非らず。

騷

歌林良材よ曰く、騷の字を萬葉よぞめると書けり、さわがしき心なり。萬葉集に「まさらをいともものさよさくさまる心もあらん我そくをしき」とあり。

坐

交撰に陸士衡長歌行に曰く、體潔坐自捐、李善が註に、無故自捐曰坐也。坐との心ならずと云ふ事なり。

些

楚辭よ出たり。諺草よ曰く、今關東人の詞の終りに、それさ、さには杯と、さの字を付ていふ、些の字音也、唐土の詞よも意義あし、唯語の終りよ云ふ事なり。

撩

山谷が水仙花の詩よ、暗香澁色撩詩句、註に、王介甫が詩よ、物華撩、我有詩句。

抑

韻會に、反語辭、又亦然之辭、又發語之辭、又疑辭よも用ゆ、と左傳の註に見えたり、本邦にの専ら發語の詞に用ゆ。

屬託

漢書の尹翁歸傳に曰く、翁歸拜東海大守、廷尉千定國欲屬託邑子、不敬曰、此賢將不可干以私。後漢書の竇融が傳よ曰く、屬託郡縣、干亂政事。往時金錢を賞料よ極めて、罪人を探求するを屬託と云、町の辻に其與ふ可き金銀をあらひよ掲げ置きし事あり、是を屬託を掛ると云ふ、これ其其人よ金銀を屬託して、罪人を搜出す也、然るに其金銀の事を屬託と誤りたるの大に非なり。

庶幾

爾雅曰く、庶幾ハコヒテガフ尚也。疏に曰く、尚ハ心の希望する所を謂ふ也。俗語の庶幾も希望の義也。

◎楚囚之狀

獄に在るも猶ほ故國を忘れざるを云ふ。左傳の成公七年、晉侯觀ス于軍府、見ニ鐘儀ニ問レ之曰、南冠シテ而擊者誰也、有司答曰、鄭人所獻楚囚也。南冠して故國を忘れざるあり。

◎屬纊之際

人の臨終を言て屬纊の際と云ふ。禮記の喪大記篇曰く、屬テ纊ヲ以俟ニ絶氣ニ註よ、纊新綿也之を口鼻に屬けて其動否を視て、以て氣の有無を驗むる也。

文學技藝

◎惻隱の心ハ仁の端なり

孟子に曰く、惻隱之心ハ仁之端也、羞惡之心義之端也、辭讓之心禮之端也、是非

之心智之端也、註よ、惻ハ傷の切なる也、隱ハ痛の深き也、此れ則ち所謂人よ忍びざる心也、羞ハ己れの善からざるを耻る也、惡ハ人の善からざるを憎む也、辭ハ解して己を去らしむる也、讓ハ推して以て人よ與ふる也、是ハ其善を知りて以て是とする也、非ハ其惡を知りて以て非とする也、人の心とする所以ハ、是四者よ外ならず、故に惻隱を論ずるよ因りて、悉く之を數ふ、惻ハ隱羞一惡辭讓一非ハ情也、仁義禮智ハ性也、心の性情を統ふる者也、端ハ緒也、其情の發するに因りて、性の本然、得て見る可し、猶ほ物外よあることありて、緒外に見ルハが如きなり。

◎尊客の前ハ狗を叱せざ

不敬を嫌ふを云ふ。曲禮の語なり、註よ、至一賤を以て尊客の聽を駭かさず。尊客の前に於て狗を叱せざるハ不敬を嫌ふが故なり、故よ諷して之を去らしむべし。

◎双鯉テがみ。

書翰を双鯉と云ふ。又魚一書尺一素と云ふ。文撰に古詩あり曰く、客從ニ遠

方來、饋我雙鯉魚、呼童烹鯉魚、中有尺素魚、晨曉讀素書、中意如何、鄭玄が禮記の註に、素の生帛也、向曰く、魚の深遠の物、漏洩せしめざるの意耳。

◎孫ハ笛吹ク

其先祖笛を吹かば、其子孫も亦必ず笛吹く者あり、是れ祖先の遺教に係る也。國史纂異曰く、唐閻立本、見張僧繇舊畫曰、名下定無虛士。

◎奏

諺草よ、唐土にてハ天子にも申を奏と云ふ、奏聞、傳奏杯云ふが如し、本邦よても同じ、俗よ奏者として、國君郡主杯へものいふ人を言るの如何よや、樂を奏すと云ふのくるしからず。

◎即心即佛

傳燈錄よ、法海禪師初見六祖問曰、即心即佛、願垂指諭、祖曰、前念不生即心、後念不滅即佛、成一切相即心、離一切相即佛、吾若具說窮却不盡、聽吾偈曰、即心名慧、即佛乃定、定慧等持、意中清淨、悟此

法門、由汝習性、用本無生、雙修是正、法海信受、以偈贊曰、即心元是佛、不悟而自屈、我知定慧因、雙修離諸物、又道一禪師一日謂衆曰、汝等諸人各信自心是佛、此心即是佛心、達磨大師從南天竺國來、躬至中華、傳上乘一心之法、令汝等開悟、楞伽經曰、夫求法者、心外無別佛、佛外無別心、僧問、和尚爲什麼說即心即佛、師曰、爲止小兒啼、僧云、啼止時如何、師云、非心非佛

器財雜具

◎宋の三大書

太平御覽。冊府元龜。文苑英華、之を宋の三大書と云ふ、各千卷なり。

◎孫子

春秋の時に作りたるものよして、其書十三篇、重に兵法を論ず、其文辭簡嚴奇正なりと古今人の賞する所なり。

草木花寶

○蹲羝

しむ。

昔し人あり芋を送る、主人芋の字を誤つて羊となし、謝して曰く、蒙惠蹲羝、と蹲羝の羊也、爾來芋の別號となれり。

通用雜錄

○若干

しやくかん。

禮記の曲禮に曰く、始服衣若干尺矣、註若如也、未定之辭、數始於一成、於十、千、字從一、從十、故言若干、謂或如一、或如十、凡數之未定者皆可言。漢書の食貨志の註、師古曰く若干の且く數を設くるの言也、千の猶は箇の如き也、此の如き箇數も當るを謂ふのみ。是の何程よても、其數を如此と云ふ義なり。韻會に、若干の猶は若干と曰ふが如し。

○藏六

寛かに坐する事を云ふ。祖庭事苑曰く、雜阿經云、有龜被野干所得、藏六不出、野干怒而捨去、佛告諸比丘、汝當加龜藏六、自藏六根魔

不得便。野干の狐の類也、六を藏すとの、頭尾兩足を甲に引入て藏すを云ふ、俗に頭を縮めて手足を引込み、安座して坐禪するを藏六つくるといふ、之に本つける也。東坡の詩、得如虎挾一若龜藏六。

○忽忽

又恣々とも書く、廣韻、遽也、又速也。晋書の衛恒傳、恣々不暇草。杜詩に、告別莫忽忽。書札の往來、忙がしくて心緒を述盡さる時、其終りに草々又の忽忽と書くのは是れ也、又恣恣と書きても然からん。

○贓物

下學集に、贓物の盜物也。我が刑法に、強竊盜の贓物あることを知て之を受け又の寄藏故買云云。字彙に、贓吏受賄也、凡非理所得財賄皆曰贓。此註に依る時の盜物に限るべからず。

○啐啄

禪林寶訓音義曰く、啐啄如雞抱卵、小雞欲出以嘴吮聲曰啐、啄聲曰啐、母雞憶出以嘴嚙之曰啄、作家機緣相投而解亦猶是矣。

◎東脩 そくしち にふらんやう。

子弟の初めて師に從ふ時の禮を云ふ。論語述而篇に、孔子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉、註に、脩、脯也、十挺を束と爲す、古の相見ると必ず贄を執りて以て禮と爲す、束脩、其至て簿と者。成語考よ、學、俸曰束脩、註に、修、脯乃乾肉也。

つづ之部

天地時令

◎月と素娥又ハ金波と號す

成語考に曰く、素娥、即月之號。漢書の禮樂志に、獲焉馬作歌曰、月穆穆以金波、註に、師古曰、言月光穆穆若流、金波、也。

◎月の桂、月の蛙、月の兎

王晋が曰く、世俗に月の桂、月の蛙、月の兎、杯と言傳へて惑へる事甚だ多

し、月の本陰精にして空虚なるものあり、何故に其中に蛙兎の類あらんや、日月天に在つて兩鏡の相照すが如し、地の其中に在り、四傍皆空水也、因りて大地の影、鏡中に映して其形ち色々見ゆ、其れを蛙兎と云ふ。故事成語考に曰く、月裡蟾蜍乃月魄精光、註よ、蟾蜍、是月中如兎者也、后羿請不死之藥于西王母、其妻嫦娥竊、而食之、奔入月宮、遂化爲蟾蜍。

人倫人品

◎鶴の雞群に立つが如し

人群の内は在りて獨り秀才ある者を云ふ。晋書に、或謂王戎曰、昨於稠人之中、始見嵇紹、昂昂然若野鶴之在雞群。

◎終に池中の物に非ず

人の他日大に爲すあるを云ふ。吳志よ、周瑜曰、劉備非久屈爲人用者、恐蛟龍得雲雨、終非池中物也。

人事身體

人倫人品 人事身體 つづ之部

◎勤ハ無價の寶たり

明心寶鑑順命篇に、太公曰、勤爲ニ無價之寶、慎是護身之符。

◎鶴ヲ騎りて楊州ニ上ル

慾情の行ハれ難きを云ふ。故事成語考曰く、壯士氣如虹、腰纏二十萬貫、騎鶴上揚州、謂仙人富貴。註に、昔有客各言其志、或願爲揚州刺史、或願多貨財、或願騎鶴上昇、其一人曰、腰纏二十萬貫、騎鶴上揚州、蓋兼三人之所欲也。書言故事曰く、人の欲する所を兼るを鶴ヲ騎りて揚州ニ上ると云ふ。又曰く、東坡錄筠軒詩、若對此君仍大噉、世間那有揚州鶴、註に、此君ハ竹也、竹ニ對する者の清雅、大噉なる者の豊富、正に兼ね全ふする能わす、清なる者の富まず、富む者の清ならず、言ふことゝるの、若し竹ニ對して已ハ清雅、仍ハ豊富ニして大噉ならん事を要す、是れ兼全を欲する也、若し能く兼全されば、則ち是れ鶴ヲ騎るの人、果して能く三人の欲を兼全す而して世更ニ揚州の鶴無し。

◎月盈れば缺

易の豐彖傳云、日中則昃、月盈則食。史記に蔡澤が曰く、日中則移、月滿則虧。釋名曰く、月缺也、滿則缺。和歌「おもへたふみつればやがてかく月のいさよふ空や人の世の中」

◎角直すとて牛殺す

少しの害を去んと欲して、却つて大なる害を求る險也。郁離子曰く、夷門之癭、人、頭没于脾、而癭代爲之元、口鼻耳俱不能爲用、郢封人憐而爲之割之、人曰、癭不可割也、弗聽、卒割之、信宿而死、國人克焉、辭曰、吾知去其害耳、今雖死、癭亦亡矣、國人掩口而退。

◎露はらひ

埃囊抄云く、萬の遊の最初にするを、卑下する心ハ露拂といふハ、禁裡ハ蹴鞠の御會の有時、かならず賀茂の人参りて、出御以前に、先蹴てあたりの露を落す、是を露拂と云ふ也。又源氏の蓬生ハ、御先の露を、馬の鞭して拂ひつゝとあり。然れば貴人の前驅をも露拂と云ふべし、今俗ハ淨瑠璃興行杯の時最初ハかたる者を露拂と云ふハ、是れより出たるものなり。

○追従

ついでしやう ねへつか。

下學集よ、追従の、媚諂の義なり、おひまたがふと讀めり。源氏帚木の巻にこのまゝ母の有様をあたらしきものには、思ひてついでしやうしよ」とあり。

○一二

文選よ、司馬遷報任少卿書、事未易下、一二為俗人言也、註に、翰曰く、一二謂委曲也。

○無恙

なつつか ぶしである。

故事成語考よ曰く、平安無事曰無恙。神異經よ曰く、北方有獸曰獐、獐恙也、常近人村落、入人屋室、人皆患之、黃帝殺之、由是此方人得無恙、憂疾、謂之無恙、此其始也。易傳よ曰く、上古之時、草居露宿、恙齧蟲也、善食人心、俗悉患之、故勞云、無恙、恙非病。事物紀原よ、演義曰、時人以無恙、謂之無恙。戰國策よ曰く、歲無恙耶、王亦無恙耶。史記の刺客傳よ、為下老母幸無恙、妾未嫁。

○強顔

強顔の猶は顔厚と言ふが如し。漢書よ、司馬遷の傳よ曰く、言不辱者所謂強顔耳。諺草に、今俗よ、つれなしと訓して安忍の事とせり。

○噉

小食を云ふ。司馬相如が大人の賦に、噉瓊華、註よ噉の食也。説文よ、噉の小食也。源氏帚木の巻にも、つゝしると云ふ詞あり。

○結頰

結の、詩經の註よ、以衣貯之、而執其衽。頰の、又曰く、以衣貯之、而扱其衽於帶間也。

○熟

つらと云ふも同じ意なり、和歌にもよめり。諺草よ、和俗よ、情の字をつらくとよむ、され共、情の雇と同字にて、賃を以て人を使ふ事なれば、意義甚だ違へり、源時綱詩、情看新艶嬌宮月、是を以て見れば誤り來ること已に久し。

文學技藝

◎土積りて山と成るつちつも やま

一日一錢千日千錢、小積りて大と成るの喻あり。説苑の建本篇曰く、人
才高しと雖も、學問を勉めざれば、聖を致す能わす、水積りて川と成れば、則
ち蛟龍生ず、土積りて山と成れば、則ち豫樟生ず、學積りて、聖となれば、則
ち富貴尊顯至る。鶴林王露曰、一日一錢千日千錢。

◎杜撰つづせん わらしらへ。

撰錯の多き著書よ云ふ。野客叢書に曰く、杜默爲詩、多不合律、故言事
不合格者爲杜撰。

禽獸蟲魚

◎鶴と陰羽と曰ふつる いんう

易に曰く、鳴鶴在陰、傳曰、鴻鴈隨陽、故汲冢書曰、鶴曰陰羽、註よ、鶴の陰

を愛して陽を惡む、故に陰羽と云ふ。

ね 之 部

人倫人品

◎鼠とる猫ハ爪かくすねづみ ねこ

古の諺に曰く、鳥の將は飛んと欲する時の、翼を伏し、犬の將は噬んと欲す
る時の、口を縮む。説苑よ、君子愛口、虎豹愛爪。

◎念方岩と通すねんりき

事を爲すに、至誠の心を以て力むるときは貫徹せずと云ふことなしと云ふ
義なり。程子曰く、陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成。劉向曰く、
誠之至也、金石爲之開、況人乎。韓子外傳曰く、楚熊渠子夜行見
寢石、以爲伏虎射之、没金飲羽、視之石也、因復射石、失摧無迹。漢
書曰く、李廣守北平、出獵、見草中石、以爲虎射之、中沒鏃、視之石

也、明日復射之、石不能入矣。後用書、李遠嘗校獵莎柵、見石叢薄中、以爲伏虎、射而中之、鏃入寸餘、就見乃石也。是れ皆至誠心の念力を以て岩を通す事此の如し。

●鼠を投ぜんと欲して器を忌む

漢書の賈誼傳に、欲投鼠而忌器此善論也、是の昔日の俗諺なり、言ふこゝろの、鼠を投げ付けて、之を撃ち殺さんと欲すれども、其傍らに器あれば、之を破らんことを恐る也、君の近習の佞臣を退けんと欲すれども、君を傷なん事を恐ると云ふ喩也。

●鼠社を憑りて貴し

欲投鼠而忌器の喩へと同じ義なり。文撰よ曰く、鼠憑社貴、言ふこゝろの、穴よ火して鼠を捕へんと欲すれども、社よ在る鼠なるを以て其社の廷焼せん事を恐れて之を爲さざる也、是れハ君側の奸臣を除かんと欲するも却つて君に害の及ばんを恐れて手を下さぬ喩也。

人事人品

●饒舌

しゃべり。

多言なるを饒舌と云ふ。傳燈錄よ曰く、閻丘胤至寺訪之、二人在厨、二人ハ寒山圍爐笑語、閻丘不覺致拜、二人連聲叱咄、寺僧驚愕曰、大宮何拜、風狂漢耶、寒山執閻丘手笑而言曰、豐干饒舌、久而放之。

●狙

史記の張良傳よ曰、良與客狙、註よ、伏して伺ふ也、狙の物を伺ふよ、必らず伏して之を候ふを云ふ、故に今狙候と云ふ是れなり。

文學技藝

●涅槃

心經の註に、涅槃乃不生不死之地、一切修行之所、世人誤以爲死大非也。大經に曰く、涅槃不生、槃言不滅、不生不滅名大涅槃。楞伽經よ、我所説者、妄想識滅、名爲涅槃、肇師涅槃論曰、秦言無爲、亦名滅度、無爲者、取其虛無寂寞妙絶、於有爲滅度者、言其大患永滅超度、四流斯蓋鏡

像之所歸、絶稱謂之幽宅也。法華經金剛經、皆云滅度、笑三藏、
翻為圓寂。

禽獸蟲魚

鼠壽三百歲

抱朴子曰く、鼠壽三百歲、滿百歲則色白、善憑人而下、名曰仲、能知一
年中吉凶及千里外事。俗よ白鼠家に在る時の、福とす、又奉公人の主家
に忠義なる者を白鼠と云ふ、是れより出しものあり。

猫よ五徳あり

揮塵譚に曰く、萬壽寺に彬師と云ふ僧あり、善く戯言を云ふ曾て客よ對す、
猫其旁らに踞する、彬師謂客曰く、鶏に五徳ありと云ふ、今吾が此猫よも亦
これあり、客其説を問ふ、曰く、此猫鼠を見て捕ふる事なし、是れ仁也、鼠來
りて其食を奪へば是れを護る、義也、客人至りて饌を設くる時、駈出る禮
也、食物を能く藏して、置くと雖も、能く竊で之を食す、是れ智也、冬來れば

則ち籠に入る、是れ信也、客これを聞て絶倒して大に笑へり。

か之部

人倫人品

南面之尊

周禮よ曰く、其位、王南郷、三公及州長百姓北面、羣臣西面羣吏北面。禮
記の効特性に曰く、君之南郷、答陽之義也、臣之北面答君也。易の繫辭下
傳よ曰く、聖人南面而聽天下、嚮明而治。史記の周公の世家、周公之
代成王治、南面倍依、以朝諸侯、及七年後、還政成王、北面就臣位。

人事身體

難事ハ必是易ぎより作る

老子に曰く、天下之難事必作於易、天下之大事必作於細。天下の難事の

始より難事に非らず必ず易きことより起りて難事となる者なり、又事より大あり細あり、天下の大事の初め細微を忽にするより起る、故に微細の事といへども慎しむべきことあり。

◎南柯之夢

夢を見たる形容を用ゆ。異聞集に曰く、淳于棼家、居廣陵、宅南有古槐樹、棼醉臥、其下、夢、二使者曰、槐安國、國王奉、邀、棼、隨、使入、穴中、見、榜曰、大槐安國、其王曰、吾南柯郡政事不、理、屈、卿、爲、守、理、之、棼至、郡、凡、二十載、使、送、歸、遂、覺、依、尋、古、槐、下、穴、洞、然、明、朗、可、客、一、榻、有、一、大、蟻、乃、王、也、又、尋、一、穴、直、上、南、柯、即、棼、所、守、之、郡、也。

◎七度尋ねて人を疑へ

漫り人々を疑ふなかれと云ふ喩也。列子曰く、人有亡鐵者、意隣之子、視其行步、竊鐵也、顔色竊鐵也、言語竊鐵也、作動態、度、無、爲、而、不、竊、鐵、也、俄、扣、其、谷、而、得、其、鐵、他、日、復、見、其、鄰、人、之、子、動、作、態、度、無、竊、鐵、者、是、れ、人、を、疑、ふ、時、の、其、人、の、所、爲、皆、悉、く、盜、賊、た、る、が、如、く、見、る、も

のなり、諺に疑心生、黠鬼、との此事也」と列子の註にあり。

◎媒口

俗言の違ひ多きを媒口と云ふ。宋の袁采が世範に云、古人謂、周人惡、媒、以、其、言、語、反、覆、給、女、家、則、曰、男、富、給、男、家、則、曰、女、美、近、世、尤、甚。

◎難問

俗に疑問の事を稱して難すると云ふ。白氏文集に、其間有、所、疑、即、請、更、難。後漢の丁鴻傳に、使中郎將、承、制、問、難。

◎名乗する、木の丸

清輔の奥儀抄に曰く、天智天皇世に包み給ふ事ありて、筑前の國上座郡朝倉山と云ふ所の、山中に黒木の屋を作りて、おはしましけるを、木の丸殿と云ふ、丸木にて作れる故也、用心をし給ひければ、入來る人、問ぬまのりをしつゝ入けるあり。奥儀抄、天智天皇の御製に、朝くらや木の丸殿にわれをれば名のりをしつゝ行はたか子を」とあり。

◎習ひ性とまゝ

書經の太甲篇に曰く、伊尹曰、茲乃不義習與性成。

◎南風競はば

書言故事曰く、衰弱不勝、曰南風不競。左傳、師曠曰、吾驟歌北風、又歌南風、南風不競、多死聲、楚必有功。

◎南面百城之樂

百城を領して人君たるの樂を云ふ。北史の李謐傳曰く、鳩巢諸經、廣按、異同、爲孔璠等、判三決、隱伏、辭、氣、磊、落、觀者忘疲、每日、丈夫擁書萬卷、何候南面百城。南面の王位也。

◎名と泰山よりも重んぢ

景行錄曰く、大丈夫、見善明、故重名、節於泰山、用心剛、故輕死、生於鴻毛。言ふこゝろは、大丈夫との小人の裏也、道義を守り身の行ひよく少しも不義は屈せざる者を云ふ、故善を見ること明に、従つて節義を守ること泰山よりも重くする也、心を用ること剛く、道義を立て、義は當りて、死すべし時の、其命を輕んずること鴻毛の如くする也、鴻毛との鳥の毛なり。

◎長居ハ恐れあり

禮記曰く、侍坐於君子、君子欠伸、撰杖履、視日蚤莫、侍坐者請出矣、諺こゝろ本づく也。

◎流を汲で源を知

荀子曰く、君子の源を養ふ、源清ければ則ち流れ清し。

◎おみやおもふ

歌林良材曰く、なみやおもふとは、人並におもふ也、古今集に「みやし野の大川野邊のふちなみのなみにおもひ我こひめやは」又万葉集にも「わかゆつる松浦の川の河浪のなみやおもは」我戀めやは是れ並と思ふ也。

◎波餘

なごりとは、おみやのこりの中略なり。左傳、晋重耳對楚子曰、其波及

◎晋者、君之餘也。

中中 俗に云ふ中々は、領承したる詞なり。和語に、中く、とつくるは、かへり

てといふ詞は通ず、此五文字は歌よよみおほせ難き也、中くと云出して、始終いひつめざれば龍頭蛇尾の病ひあれなり。

◎無禮

枕草子よ、ふみことばのきめぎとあり、諺草よ、是れ文牀無禮よ、かるくしき意也、今俗に、あめすぎるると云ふも、なめん墮落と云ふも、無禮の過る意也。

◎風俗

ふうぞく。

孝經に曰く、移風易俗、莫善於禮。吳臨川曰く、風者上之化所及、俗者下之習所成。漢書の地理志よ、人有剛柔緩急、音聲不同、繫水土之風氣、故謂之風、好惡取舍動靜嗜欲、故謂之俗。

◎捺落

ぢやく。

名義集の地獄篇よ曰く、捺落迦、或那落迦、此云不可樂、亦云苦具、亦云苦器、此標依報也。

◎乍

チハ

韻會の蒼頡篇よ、乍、而辭也、禮運の註疏よ、祭三百神、曰蜡、陸佃云、蜡讀曰乍、一有一無爲乍、物之生死老少、一有一無、何有窮己、是之謂乍。諺草よ、俗よながらといひ、つづといふも、辞を両よする時よ用ゆ、譬へば惡と知りてせぬはよき也、惡と知りつゝなすといふは、心と行と、一は有一は無なり、人の苦勞を厭は、招かざるがよき也、苦勞あがら出給へといふは兩辭也、此韻和俗文字を用ゐるの妙也。

◎勿

オウ

俗に人を戒しむる時に、なしと、なみと云ふ、などの云は勿の字の義也。朱子の曰く、勿者禁止之謂。これあらざるやうにと戒むる時よ用ゆ、萬葉集よ、勿降をなぶりそとよみ、日本紀よ、勿視をのみそと讀めり。

◎形

カガリ

身あり、着なり杯に用ゆ。枕草子よ、かたちよく、なりなどつねよよくてあらんは、ましてよからんかし」とあり。

◎南山之壽

なんざんのじゆ

長壽を云ふ。詩經の天保篇に曰く、如南山之壽、不騫不崩、如松柏茂、無不爾或承。

器財雜具

南史 北史

南北史は、唐の李延壽の撰じ所なり、而して南史の百七十年間南朝の事を紀す、其書本紀十卷列傳七十卷あり、北史の二百四十二年間の事を紀す、其書本紀十二卷列傳八十八卷あり。

ら之部

天地時令

臘月

臘は十二月の祭りの名を云ふ。故事成語考よ、秦陰歷十二月の異稱也。

人終歲祭神曰臘、故至今以十二月爲臘。禮記の月令よ、天子臘先祖五祀。

落居

人の家居を占て聚り居るを村、落屯、落離、落と云ふ、事の騒動なく本所よ安んずるを落居すると云ふ、斯の其所よ安堵する義なり。

人倫人品

藍田玉と生老

父子を賞譽する言也。書言故事よ曰く、稱譽父子、曰藍田生玉、諸葛恪少有名、孫權見其父瑾、曰藍田生玉、真不虛也。

老弱

諺草よ、今俗には老若と書てらうにやと唱ふ。孟子梁の惠王之篇よ曰く、老弱轉乎溝壑。

老成者

詩の大雅蕩の篇に、殷不用舊、雖無老成人、尙有典刑、註に、老成人舊臣也、典刑舊法也。

人事身體

●落魄 らくはく おちぶれ。

成語考より曰く、落魄夫失業謂無依。史記の酈生傳より曰く、酈生食其者、陣留高陽人也、好讀書、家貧落魄、無以爲衣食業。

●狼狽 らうばい うろたへる。

世説より曰く、明且報仲智、仲智狼狽來。狼狽といふ二獸の相倚る也、狼前而足絶短、每行常駕于狼、失狼則不能動、故に人の頗び迷ふに喩ふ。

●雷同 らうどう

人の言を聞きて之に附和するを雷同と云ふ。雷の聲を發して物の同じく之に應ずるが如き也。歐陽公の春秋論に、雷同衆說云云。諺草より俗に雷同するをあどうつと云ふ、拾玉集の歌よりさこそといは、誠よさこそあどうつ

●培明 いぢあけ ちてあやそやといふ人だよもなし

培明といふ物の屈塞したるものを發開するを云ふ。諺草に、培の竹を並べ立て、結びたるものなり、今培明といふ詞の、古き詞あり、昔し南都よて、春日大明神祭禮の時、一夜神輿を外にうつし、其まじりに、培を結て人の狼りに近づき觸ん事を警む、其翌朝、今春氏の猿樂幣を持來て、始めて獨神樂の前より詣で培を開ひて祝言をよむ、是より諸人共に入る、此故に物の塞りたるを開くを、培明といひ來れり。

●來儀 らいぎ ひどがくる。

人の訪ひ來るを來儀と云ふ。書經益稷の篇より曰く、簫韶九成鳳凰來儀、註に、來儀の來り舞て容儀ある也。文撰の王巾が頭陀寺の碑文より、金粟來儀、註より、銑曰、金粟佛名也、來儀謂見於世。

●老氣 らうき

老病を云ふ。又勞氣とも云ふ。源氏夢の浮橋卷に、はよのあまのらうけ、

にのいかよおこりて」とあり。

○臆次

物の次第なきを、らつしもなきといへり。野槌云、臆の出家するもの、髪をとり授戒してより、一夏九旬の間、勤行するを臆といふ。僧臆戒是也、僧の位、戒律の前後より依りて次第するなり、是より事の次第するを臆次と云ふ。按ずるに、職原、極臆とあるも位階の名也、然らば上臆下臆の、上位下位といはんが如し。

○落花枝より歸らば

再び歸らざる事に喩ふ。

五燈會元の卷に、落花難上枝、破鏡不重照。

○落花狼藉

後の江相公傳の詩より曰く、落花狼藉風狂後、啼鳥籠鐘雨打時。諺草に、落花狼藉とい、風吹たる後、花のちりくよなりて、地より打みだされたるの、踏ちらしたる様より狼藉ありと云ふ意なり。藉を誤りて藉と爲すのこゝろし。

○狼藉

ふみちらす。

狼藉とい、狼が物を踏散したる如く亂れたるを云ふ。史記の淳于髡傳より見ゆ。

通鑑の演義に曰く、狼藉草而臥、去則雜亂、故物之縱橫敗亂者、謂之狼藉、藉踏也。

○老驥櫪より伏して志千里より在り

老年の壯圖を云ふ。世記に曰く、王敦每醉後、以鐵如意敲唾壺、歌曰、老驥伏櫪志在千里、烈士暮年壯心不已、歌闋唾壺半缺矣。言ふこと、るの馬老て櫪より伏すと雖も猶ほ千里を飛んとするの志あり、人老たりと雖も壯時を忘れず、老馬と同じ勇あるを云ふ。

○萊公の六悔

寶鑑存心篇に、朱文公曰く、寇萊公六悔の銘より、官より私曲を行ふて失する時悔ゆ、富て用を儉せず貧しき時悔ゆ、勢ひあつて少しも惜まずして過る時悔ゆ、事を見て學ばざれば用ひる時悔ゆ、醉後の狂言の醒る時悔ゆ、安んじて養生せざれば病む時悔ゆ。萊公の六悔是なり。

○濫吹

まざれもの。

韓非子曰く、齊宣王好竿、必三百人齊吹、南郭先生不善竿而濫、二百人之中、以食祿、宣王薨、潘王立、欲一一吹之、先生乃逃。諺草に、南郭が濫り、竿を吹く故事より、今もまぎれものを、濫吹と云ひ來れり、或ハ濫竿ともいふあり。

宮室官殿

落成

ひねわけ。

成語考に曰く、創造已畢曰落成。鶴林玉露に、楚詞云、淩秋菊之落英、釋者云、落始也、如詩之落、謂初英也、古人言、語多如此、故以亂爲治、以臭爲香、以擾爲馴、以慊爲足、以落爲萌。

文學技藝

洛陽紙價貴し

成語考曰く、競尚佳章曰洛陽紙貴。晋の左思字の大仲、易術ヲ精し、

爛額

やがく。

都賦を作り次、三都を賦す、思を構ふこと十年、賦なるに及んで、張華見て歎じて曰く、斑張の流ありと、是は於て洛陽豪富の家、競ふて之を傳寫す、紙價爲めに貴となる。是れ洛陽紙貴との佳章を尙ふ也。

夜學するを云ふ。史記の墨翟傳に、焦頭爛額爲夜學。韓史曰く、韓

魏公、夜作書、侍兵執燭、燭下傍、燭然、公鬚、以袖揮之、作書如故。

獺祭之譏

談苑に曰く、李商隱、唐人也、字義山、爲文多簡、閱書冊、左右鱗次、號獺祭魚。言ふこと、その文を作るよ多くの参考書を閱覽して左右に、散亂したる有様の恰も獺の魚を祭るが如き也。禮記の月令よ、孟春月、獺祭魚。

器財雜具

雷神之圖

國史補よ、雷州よの春夏雷多し、秋日よの雷地中よ伏し、隱る、其狀虺の如

し、人取て此を食ふ。後漢の王充が論衡よ、雷の状を圖よし、寫さんと欲せ
ば、總輪に大鼓を連ねて、累々として圓なり、其輪の中に力士の如き一人あ
り、此を雷公と云ふ、此人左の手よの連鼓を引き、右の手にハ大鼓を推つと
云へり、是れ雷神圖按と云ふべし。

草木花實

蘭と王者の香と爲す

成語考よ曰く、蘭爲王者之香。佩文韻府よ、金操曰く、孔子自衛反魯、幽
谷中見蕪蘭獨茂、難曰、蘭當爲王者香、今乃與衆草爲伍、乃止車援琴
鼓之、託辭於香蘭云。

婪尾春

芍薬の異名あり。胡嵩の詩に、餅裏數枝婪尾春。桑維翰田よいふ、芍薬を
婪尾春と爲す、即ち最後の名、芍薬春を殿す、故に其名を得たりとあり。

通用雜錄

濫觴

はじめ。

物の始を云ふ。家語よ、江始出岷山、其源可濫觴、及至江津、不可
揖、不可以涉、言ふこゝろの、楚江の始の岷山より出づ、源の觴を濫る
程の滴滴たる小水なれども、次第に漫りて楚國よ流れ入りてハ、滄波萬頃、
舟船よ非ざれば渉る可からざるの江河となれり、故よ始の事を濫觴と云ふ。
山谷の詩に、岷江初濫觴、入楚乃無底。

落落

成語考に曰く、落落不合法之詞、註よ、帝謂耿弇曰、將軍前在南陽、建此
大策、常以爲落落難合。

駱驛

ざろくつやく。

駱驛ハ相連なりて人馬通行の絶ゆるを云ふ。文撰に、魯靈光殿賦よ、縱
橫駱驛各有所趣。或ハ絡驛よ作る。

心之部

人倫人品

◎馬の耳は風

人の教誡も耳に入らぬ險あり。東坡が六言の詩は、青山自是絶世、無人誰與爲容、説向市朝公子、何殊馬耳東風。

◎無爲にして至正を守

禮記に、王中心無爲也、以守至正。無爲の心に思ふ無きを云ふ、故に唯中心よ至正を守るの義なり。

◎馬疲れて毛長し

朝野僉戦は曰く、貧智短馬疲毛長。人貧苦なれば智恵も亦短くなるや常あり、馬疲るときの肉落ちて毛も亦長くなるの理なり、然れども是れ凡庸人の事にして、苟くも道に志して徳を脩むる時の、心安くして智長く、老て

の益々壯んに、窮しては益々固くなるべし、孟子に曰く、富貴不淫、貧賤不移、威武不能撓、大丈夫の此の如くならざるを得ず、明道の詩は、富貴不淫、貧賤樂、男子到、此是英雄。

人事身體

◎矛盾之説

自ら言ふことの相違するを矛盾と云ふ。韓非子に曰く、楚人有下鬻三楯與一矛者、譽之曰、吾楯之堅、莫能陷也、又譽其矛曰、吾矛之利、於物無不陷也、或曰、以子之矛、陷子之楯、如何、其人弗能應也、夫不可陷之楯與不可不陷之矛、不可同世而立、今堯舜之不可兩譽、矛盾之説也。又曰く、夫賢之爲勢、不可禁、而勢之爲道也、無不禁、以不可禁之勢與無不禁之道、此矛盾之説也。諺草は、中の悪き事を矛盾と云ふ、是の矛の人をつきさらんとし、楯の人をふせがんとする意なり。

◎馬は道まひす

老成者の言、用ゆべしとの喩也。韓非子曰く、管仲從桓公伐孤竹、春往冬還、迷感失道、管仲曰、老馬之智可用也、仍放老馬而隨之、遂得道。又明詠の詩、雪中放馬朝尋跡。歌曰、夕ざれば道も見らねとふる里のほととぎし駒よまかせてと行。是れ山中道を失ひたるとき、老馬の智を借りて、道を求めたる故事なり。

◎紫朱と奪ふ

論語に、子曰、惡紫之奪朱也、惡鄭聲之人亂雅樂也、惡利口之覆邦家者、註、朱正色、紫間色、雅正也、利口捷給、覆傾敗也、范氏曰く、天下の理、正よして勝つ者の常に少く、不正よして勝つ者の事多し、聖人之を惡む所以也、利口の人、是を以て非と爲し、非を以て是と爲す、賢を以て不肖と爲し、不肖を以て賢と爲す、人君苟くも悦びて之を信する時の、則ち國家の覆くや難からず。

◎馬に騎て見よ

俗諺に、馬よの騎て見よ、人には傍て見よ、との人を相するの難きを云ふ。

史記よ、相馬失之之瘦、相人失之貧。

◎席暖まらざる暇あらざ

人の居所を時々轉ずるを云ふ。書言故事曰く、韓文公席不暇暖、註、孔子四方は用流し、以て其教を行ふ、座席未だ暖まらずして則ち往く。

◎六日の菖蒲

用に立ぬを云ふ。菖蒲陰曆五月五日に用ゆるものなれば、六日に至らざる無用のものとある也。衣笠内大臣の歌、いかよせん今の六日のあやめ草ひく人もなき我身なりけり。

◎無爲之治

論語の衛靈公篇よ、子曰、無爲而治者其舜也與、夫何爲哉、恭己正南面而已矣、註、無爲にして治まる者の、聖人徳盛んにして民化す、其作爲する所あるを待たざる也。老子に、爲無爲、則無不治。易よ、黃帝堯舜垂衣裳

而天下治。

◎馬の如し

俗に物の大なる事を馬の如しと云ふ。本草綱目の馬蘭の條下、時珍曰、俗稱三物之大者爲馬也。

六借

とづらとしき事を六借と云ふ。源氏物語などよも所々に在り、古歌よ「おもふ事一つかかへば又一の三の四つ五のひつかしの世や」。

無方

禮記の經解に曰く、不隆禮不由義謂之無方民。史記の禮書に曰く、禮者人道之極也、然而不法禮者不足禮、謂之無方之民、註に、鄭玄曰、方は猶ほ道の如し。諺草に、俗は道理は味く禮義をも知らぬ愚人を無方者と云ふ。

夢想

後漢書の黃霸傳に曰く、夢想賢士。唐の李白が詩に、日夕聽猿愁、懷賢盛夢想。

無常

釋氏要覽の禪法師が序に、生滅輪廻是を無常と云ふ、色心影幻是を苦本とす、故に涅槃に是を河に喩へ、法華に是を火宅に方ふ。名義集に曰く、薩迦那此云無常。

謀反

史記の張良傳に出たり。通鑑の凡例に云、謀ごと有りて未だ之を發せざるものを謀反と云ふ。

熟

諺草に、萬の事を仕済たるを、むまいと云ふ、此字なり、食物の味能むまいといふも亦此字也。

文學技藝

馬に倚て待可し

人の文を作るに速かなるを云ふ。書言故事に曰く、作文敏捷謂之倚馬可待。唐李太白嘗曰、請試萬言倚馬可待。

通用雜錄

◎無盡藏

東坡の赤壁賦よ、天地之間各有主、苟非吾之所_レ有、雖一毫_一莫_レ取、惟江上之清風與三山間之明月、取_レ之無_レ禁、用_レ之不_レ竭、是造物者無_レ盡藏也。

う之部

天地時令

◎天池

藝林伐山に曰く、海を天池と云ふ、註よ天と言ふ者ハ、天造地没あり。莊子の逍遙遊篇に將_レ徙_ニ於南冥_ニ南冥天池也。

◎本居

風土記よ、尾州葉栗郡若栗郷よ宇夫須那社あり、盧天姫、誕生産尾の地なる

故、此名ありとかや。諺草よ、あながち神の心かくとも、只所_レ生_レの地をもうぶすなと云ふ、日本紀本居とかけり。

◎宇宙

藝林伐山故事よ曰く、上下四方曰_レ宇、往古來_レ今日_レ宙、人皆知_レ之而不知_ニ其出_ニ千尸子_一也。

人倫人品

◎禹域の四聖

伏犧。文王。周公。孔子、是を禹域の四聖と云ふ。

◎牛の前よしらぶる琴

愚鈍の人よ向つて理を述べ、道を解くも毫も了解せざる事の喩也。野客叢書よ曰く、對_レ牛彈_レ琴、諺是よ本づけり。祖庭事苑よ、魯賢士公明儀對_レ牛彈_レ琴、弄_ニ清角_ノ之操、牛食如_レ故、非_ニ牛不_レ聞、不_レ合_レ耳也、轉爲_ニ蚊虻_ノ之聲、乳犢之鳴、乃掉_レ尾踐_レ蹄、奮_レ耳而聽、合_レ意故也。

◎魚を得れば祿を失ふ

人の剛直あるを云ふ。事文類聚の別集性行部に云、或人鄧國の宰相に魚を餽りし、宰相辭して受ず、或人訝り問て曰く、公大に魚を嗜むにより此を餽る、然るも魚を受けざるの如何、されば我れ大に魚を嗜むが故に受ず、魚を受ければ祿を失ふ以て魚を食ふ事能わす、受ずして祿を得ば終身大に魚を食はんと答へたり、是れ贈賄を容れたるが爲めに失わらんを恐れてなり。

◎疑を絶ち讒を去る

人君たる者は流言を用ゆべからずとの義あり。史記よ、明王絶疑去讒、屏流言之跡、塞朋黨之門。朋は他人中の友也、黨の親族中の友なり、此れ人君たる者の政道上に於て親疎好惡有るべからずとの意なり。

◎牛と飯角と叩く

世に用ゐられざるを諷する義なり。三齊略記に曰く、寧戚飯牛、車下叩角而高歌曰、南山粲、白石爛、生不逢堯與舜、短布單衣纒至脣、長夜漫漫何日旦、桓公用以爲宰。

◎優婆塞 優婆夷

俗體の儘佛の弟子となり、五戒を受けたる男子を優婆塞又善男子と云ひ、全しく女子を優婆夷、又善女子と云ふ。名義集に淨名疏云、此云清淨、淨、淨、女、亦云善宿、男善宿、女雖有居家、持五戒。涅槃經よ曰く、善男善女受三歸依、是則名爲優婆塞、云云。

人事身體

◎魚の釜中よ遊ぶが如し

生ることの久しからざるを云ふ。網鑑に、漢の順帝紀に曰く、廣陵賊、張嬰曰、相娶倫生、若魚遊釜中、知其可不久。

◎烏合之衆

文撰の晉紀總論に曰く、彼劉淵者、離石之將、兵都尉、王彌者、青州之散吏也、蓋皆弓馬之士、驅走之人、凡庸之才、非有吳先主諸葛孔明之能也、新起之寇、烏合之衆、非吳蜀之敵也、註よ、烏合之衆とは部分なきを云也。

◎烏雲之陣ウツクンのタテ

烏雲之陣とい、烏散じて雲合ふ、聚散常なく、變化窮まりなき陣法を云ふ。六韜の豹韜烏雲山兵篇に、太公曰、凡三陣、處チルキハ山之高キコチ、則爲敵所キコチ、樓ル、處ル山之下シタ、則爲敵所キコチ、四、既以被レ山而處ル、必爲烏雲陣、烏雲之陣、陰陽皆備、或屯ス其陰、或屯ス其陽、處ル山之陽、備ル山之陰、處ル山之陰、備ル山之陽、處ル山之左、備ル山之右、處ル山之右、備ル山之左、云云。

◎有想無想ウツクムウツクム

取ツまじへたるを云ふ。法華經フワキョウ、世界六趣四生、衆生、卵生、胎生、濕生、化生、若、有形、無形、有想、無想、非有想、非無想、無足、二足、四足、多足。

◎優曇華ウツトンプワ

佛家にて専ら云ふ、極めて遇オホがたき喻也。諺草に、佛家に専ら云ふ事也、今世話に、常に喻事とす。楞伽經の疏に曰く、優曇華、於世間中、無一人曾見者、依中國、此樹直從條出、菓、其大如捲、爲香美而無華、過去未來無

見者。法華經に曰く、其人甚希有、過於優曇華、疏ス云、鉢名瑞應、三千年一現、則金輪王出。久安百首中の歌に「玉椿ひかりを磨く君が代にもよかへり咲うとんげの花。」榮花物語エハナノコトワザ、女院の御さげ物うとんげを作たり。東鑑トウカン云、日本にて、芭蕉の花を優曇華と云ふ。

◎雲泥ウンデ

ねほちがひ。

雲は天に屬し、泥の地に屬す、故に相隔つ事コトを喻ふ。白樂天の詩に、會面隔雲泥。橘の正通が詩ウタ、花月一窓交昔陸、雲泥万里眼今窮。

◎憂悲ウイヒ

諺草に云、苦惱を云ふ時の、此字なり、又下郎のけなげなるを譽るの、有意奴也。布引の四段目に、松浪檢校が其子小櫻を譽る詞ウタ、「有意奴出來した」と云ふの此字あり。

◎胡亂コラン

諺草コトワザ云、うるん、唐音也、又胡說亂道コトワザの、もと中華の俗語なり、みだりかはしき事を云ふ。

◎ 稚稚

神代の卷に、國稚、地稚、口訣に、國守伊志、地守伊志也、稚幼也」とあり。未だ人とみらぬ意と同じ、うい／＼といふも未だ物の定まらぬ事也。

◎ 鬱陶

書經五子の歌よ、鬱陶乎予心。孟子の離婁の篇に曰く、鬱陶思君爾。註に、思ふ事の甚だしふして、氣伸ぶることを得ざる也。

◎ 迂濶

まげさかるとよむ、まはり遠きことを云ふ。史記孟子の傳よ、迂遠而濶。於事情。漢書の王吉傳よ、其言迂濶。

◎ 打忘

諺草に云、俗よ打の字を付ていふ事多し、其中に用ゐてよきあり、又よからぬあり。歐陽公文集の歸田録よ曰く、今世俗言語之訛、而舉世君子小人皆同其謬者、惟打字爾、其義本謂考擊、故人相擊、以物相擊、皆謂之打、而工造金銀亦謂之打可矣、蓋有槌過作擊之義也、至於造舟車者、

曰ニ打レ船打車、綱レ魚曰レ打魚、汲レ水曰レ打水、役レ夫餉飯曰レ打飯、兵士給ニ衣糧曰レ打衣糧、從者執傘曰レ打傘、以レ餅黏紙曰レ打黏、以ニ丈尺量レ地曰レ打量、舉レ手試眼之舟明曰レ打試、至於名儒碩學、語皆如此、觸事皆謂之打、而偏檢三字書ニ了無此字、其義主老擊之打、自音讀歌、以三字學言レ之打字從手從丁、丁又擊物之聲、故音讀歌爲是、不知因何轉爲丁雅也。是を以て見れば、和漢共訛を同ふするものなり。

◎ 噂

噂とは聚り談する事を云ふ。朱傳よ曰く、噂、噂沓沓多言以相説、而背則相憎。詩經十月之交篇に、噂沓背憎。

◎ 寫

韻會よ云、本を轉ずるを寫と云ひ、又摹畫を寫と云ふ。器倒よして中に在る物を、他器へ傳ふるを寫とも云ふ。曲禮よ、器之漑者不寫、其餘皆寫。

◎ 惱

いやなる事を云ふ、又なやましき意也。諺草よ、俗説よ據れば、醍醐帝の時

管公と時平、左右の大臣たり、時平の讒よ因りて、管公の大宰權帥よりつされ、配所にてはて給ひぬ、其靈時平を惱まして、程なく左大臣も死せり、是を右流左死と書て、かれこれよからぬ事を、うるさしと言傳へたり、云云、此説非なり、管公より前の歌よ、うるさしといふ詞多ければ、管公より後に、此詞出たるに非ず。

宮室官殿

芸窓

書室を芸窓と云ふ。禮記月令の註よ、書房毎以芸香草辟蠹魚故名。爾雅に、仲冬之月、芸始生似邪蒿而香可食。

芸閣

龜蒙典略よ曰、芸香蠹を辟く、故に藏書の臺を芸臺と稱し、閣を芸臺と稱す。書言故事に曰く、藏書以芸草辟蠹註に、蠹の書蠹也。

文學技藝

云云

しかく。

漢書の註に、師古曰く、云云の猶は如此、此如此言ふが如し。文撰元瑜が書に、其言云云、註に、銑曰く、云云謂辞多累不能載也。廣雅に曰く、云の有也、下文よ尙は雲の如く言われなり。云云の多言を謂ふ也。云云の長き詞を擧て下の語を畧する時、云云と書也。

器財雜具

鳥號之弓

前漢書の郊祀志よ曰く、黃帝鼎成、有龍垂髯下迎、黃帝上騎墜弓、百姓乃抱其弓而號、因名之曰鳥號。

通用雜錄

鬱攸災

くわし。

火事の災に罹るを云ふ。左傳に、司驛火、火踰公宮桓、僖災子服景伯

命濟ニ濫帷幕。鬱攸の火氣なり。命濟ニ濫帷幕。鬱攸の火氣なり。命濟ニ濫帷幕。鬱攸の火氣なり。

兔走鳥飛。兔ハ月、鳥ハ日也、故に月日の早く過ぐるを云ふ。五經通義に、月中有レ兔有レ蟾蛤一何、兔陰也、蟾除陽也、而與レ兔並明、陰係ニ於陽一也。淮南子に、日中有レ駿鳥、踐趾也。

兔毛の末。物の細かなるを云ふ。孟子梁惠王篇に曰く、明足ニ以察ニ秋毫之末、毛至ニ秋而未銳、小而難見也。

の之部

人倫人品

農ハ國の本。帝範曰く、夫食爲ニ人天、農爲ニ國本。言こゝろの、食物ハ人の天命をたも

つもの也、農業ハ、政の根本也、故に民を治むるに、先づ第一は食物を充しめ然して後ち道を教ゆ。

囊中之錐

囊の中ニ鱖の隠せず」と云ふ諺と同じ、賢才あるを云ふ。史記の平原君傳よ平原君曰、夫賢士之處世也、譬若ニ錐之處ニ囊中、其先立見、今先生處ニ勝之門下、三三年於此矣。

人事身體

農民の息が天よ上る

古語よ、人事下よ違へば、天變上よ現るゝが如し。萬葉集の歌に「大野山さり立とれたる我なげくおきその風よ霧立わたる」是れ民のいき天に上るなり。諺草よ、農民の息が天よ上るとい、たとへば、堯舜の代にハ一夫も其所を得ざる事を憂ひ給ふが故よ、万民感化して父母の如き仰ぐよより、おのづから祥瑞多く、雨塊を破らず、風枝を鳴さぬ、大平の世なりし也、樂紉が時よ

の、下をしへたげなやまず故、農民愛ひ苦んで、共亡ん事を願ふ、其氣天よ通じて、天下に凶災多く、終よの滅亡よ及べり、代々かやうの喩へ少あからず、是れ農民の息、天に上るよ非ずや。史記に、酈食其曰く、王者以民人為天。

文學技藝

能

材藝あるものを能と云ふ。書經の大禹謨曰く、莫與汝爭能。漢書の高祖傳よ、能薄註よ、師古曰、能謂材也、能本獸名、形似熊、足似鹿、爲物堅中而強力、故人之有賢材者、皆謂之能。諺草よ、今俗に、少の藝をも能といふ、又猿樂のわざまでも能といふの心得あり。

草

萬葉集に、草の字をのらと訓せり、たゞ野原の事也。諺草よ、今俗よ、何の所業もなく、遊びあるく者とのら者といふり、うつけたる者の、野原よ草の

はへて、徒らに眺眺として何の景もなきが如くなるよたとへたり。

くぐ之部

天地時令

花朝

陰曆二月十五日を花朝と云ふ。提要録に、二月十五爲花朝、高麗以是日爲上元節。佩文韻府よ、梁元帝詩、花朝風夜動、春心誰忍相思不相見。

光陰箭の如し

山谷の詩に、日月過箭疾。卜部兼好曰く、一錢輕しと雖も之を積まば、以て貧人をして富しむべし、一日短しと雖も之を累ぬれば、以て一家を終るべし、世に寸陰を惜む人少なき誠よ歎す可し。西人曰く日月を捕ふべき手無し。

人倫人品

◎皇帝くわてい

事物紀原曰く、史記の始皇本紀二十六年に、秦初めて天下を并す、合して曰く、六王咸く伏して天下大に定まる、名號更めざれば、以て成功を稱する無けん、其れ帝號を議せよ、王、縮李、斯等帝號を議して曰く、古に天皇有り、地皇有り、秦皇有り、秦皇最も貴し、尊號を上りて、王を秦皇となさん、王曰く、奏を去て皇に着かん、上古の位號を采りて、號して皇帝と云はん、曰く、秦天下を兼ねて、皇帝の號を建つ、註曰く、五帝の自らおもへ以らく徳三、皇に及ばすと、故に皇號を去る、三王の又以らく徳五、帝よ及ばすと、故に損して王と稱す、秦自ら以らく徳二代を兼たりと、故に兼ねて之を稱す。

◎官家くわんけ

てんし。

事物紀原に曰く、劉向の説苑に曰く、鮑、白、令、秦の始皇よ對へて曰く、天下の官の則ち賢に譲り、天下の家、則ち世々繼ぐ、故に曰く、五帝の天下を以て官と爲し、三王の天下を以て家と爲すと、蔣濟の萬機論曰く、五帝の天下を官にす、故に之を賢よ傳ふ、三王の天下を家にす、故に之を子に傳ふ、

今天下を指して官家と爲すの、則ち猶ほ帝王と言ふが如き也、其義此よ始まる。

◎國之爪牙くわいのつめ

一國の大將を云ふ、爪牙といふ爪の虎の爪なり、牙の獅子の牙なり、故に爪牙の肝要と云ふ事あり。漢書に曰く、戰克之將、國之爪牙、不可重之、犬馬之有勞於人、尙加帷蓋報、況國之功者乎。

◎瓜葛之親くわがつのしん

しんるゐ。

瓜葛といふ、蔓生よて枝葉相纏ふ、故に人の親戚の相連なることを瓜葛の親と云ふ。後漢書の禮儀志上、陵儀の註に、苟在下先帝有瓜葛之屬、男女畢會、云云。成語考よ、共叙舊姻、曰原有瓜葛之親。

◎和すること琴瑟の如し

夫婦の和合を云ふ。成語考よ曰く、如鼓琴瑟といふ、夫妻好合の謂、琴瑟不調といふ、夫妻反目の詞。書言故事よ曰く、夫婦和曰琴瑟調。文撰に潘安仁の夏候常侍誄よ曰く、子之友悌、和如琴瑟、註よ、良曰く、友悌

の兄弟あり。

◎國の興るハ諫臣の在り

家語に曰く、國之將興實在三諫臣、臣家之將榮必在爭子。說苑、國之興也、天遣賢人與極諫之士、國之亡也、天與亂人與善諛者。

◎國の三寶

六韜に、太公曰く、國有三寶、大農、大工、大商、農一其郷則穀足、工一其郷則器足、商一其郷則貨足。疏に農人細工商人の三者、其一を欠くときは、國用足らず故に三者を寶とす。

◎君臣道よ合ふ

寶鑑に曰く、夫臣以君爲體、君以臣爲心、君安則臣安、君上愁臣下不樂、心中有愁、體外不悅。臣軌同體章に曰く、夫人臣之於君也、猶下四支之載元首、耳目之爲中心使也、相湏而後成、體相得而後成。又曰く、臣之事君猶子之事父、父子雖至親、猶未若君臣之同體也。又曰く、

臣以君爲心、君以臣爲體、心安則體安、君恭則臣泰、未有心瘁於中、而體悅於外、君憂於上、而臣樂於下。

◎君子の交り淡して水の如し

禮記に、君子之交、淡若水、小人之交、甘若醴、君子淡以親、小人甘以絶、彼無故、以合者、則無故以離。

◎管鮑之交

親友の厚誼を云ふ。左傳に、管仲與鮑叔賈、分利自多、與鮑叔不以爲貪、知仲貧也、管謀事窮困、鮑叔不以爲愚、知時有利不利也、管三戰三走、鮑叔不爲以怯、知仲有老母也、仲曰、生我者、父母、知我者、鮑叔也。

◎鰥寡孤獨

孟子に曰く、老而無妻曰鰥、老而無夫曰寡、幼而無父曰孤、老而無子曰獨、此四者天下之窮民而無告者、文王發政施仁、必先斯四者。老經に、治國者不敢侮鰥寡、而況於士民乎。

◎君徳惟臣

尙書曰く、君徳惟臣、不徳惟臣。君徳の行へる人も、臣の能く輔佐するに依りて也、君徳あらざれば臣諂て不義を行へしむる故なり。

◎愚者之一得

史記の淮陰侯傳よ、廣武君曰、智者千慮、必有一失、愚者千慮、必有一得。

◎愚蒙 愚鈍 愚癡

愚蒙又愚蒙とも書く、杜子美の詩よ、此語亦足爲愚蒙。文撰楊子幼が書に、足下哀愚蒙、註よ、蒙暗也。愚鈍、朱子の文集よ、自少愚鈍。愚癡、癡説文に云、不慧也。

◎愚者慮らざ

法句譬喩經に曰く、或る愚人母に孝行よして、朝夕事を爲す、夏季蠅多く集りて、彼の愚人の親の頭を踏む、愚人大に怒りて、我親の頭を踏む蠅なれば忍堪なり難しと横推を以て蠅を打殺さんとして我親と共に殺したり、是れ

孝行に似て孝行よ非ず、愚慮なき愚人の所爲あり。

◎君子の過ちハ日月の蝕の如し

論語に、子貢曰、君子之過也、如日月之食焉、過也人皆見之、更也人皆仰之。君子の過ちハ少しも掩ひ隠さるる故よ、日食月食の如く、あらわにして人皆之を見る也、君子ハ過ちを改むるに、速かあるを以て暫時よして能く改む、既よ改むれば人皆仰き貴ぶ也、小人ハ然らず、過ちを掩ひ隠して人の知るを恥づ、故よ改むるを憚りて、一生過ちを遂ぐ。

◎瓜田よ履を納れ

嫌疑を避くるを瓜田の履と云ふ。文撰に、君子防未然、不處嫌疑間、瓜田不納履、李下不整冠、註よ、翰曰く、納ハ取也、履を取らば瓜を盗むかと疑はん、冠を正さば李を盗むかと疑ふ也。列女傳よ、齊威王虞姫謂王曰、經瓜田不納履、過李園不整冠、妾不避此罪一也。

人事身體

◎挂冠 くわいぐわん ししよく。

官を辞するを挂冠と云ふ。後漢書に逢萌字子慶、北海都昌人、之長安、學通春秋經、時王莽殺其子宇、萌謂友人曰、三綱絕矣、不去禍將及人、即解冠挂東都城門、將家屬、浮海客於遼東。字彙に、挂の音卦、懸也、俗用掛非、掛別也。

◎官は當りの法三事あり

董蒙訓曰く、當、官之法、惟有、三事、曰清、曰慎、曰勤、知此三者、則知所以持身、君に仕へて官職を司る者の、清慎勤の三者を知り、其身を持つべしとなり。

◎國と治むるの道

孝子經曰く、治大國如烹小鮮、韓詩外傳曰、烹魚煩則碎、治民煩則散。六韜曰、武王問太公曰、治國之道若何、大公對曰、治國之道愛民而已。

◎國之三不祥

說苑曰、晏子曰、國有三不祥、夫有賢而不知、一不祥也、知不用、二不祥也、用而不任、三不祥也。漢書に曰く、任賢必治、任不肖必亂、必然之道也。

◎國の大事は賞罰に在り

貞觀政要に曰く、太宗曰、國家大事唯賞與罰、若賞當其勞、無功者自退、罰當其罪、爲惡者誠懼、則賞罰不可輕行也。

◎會稽の恥と雪ぐ

史記の貨殖傳に曰く、勾踐十年、國富遂報強吳、刷會稽之恥。又曰く、范蠡既雪會稽之恥、乃喟然而歎曰、計然之策七、越用其五、而得意。淮南子の註曰、雪の字を拭ふとも洗ふとも釋せり、清むるの意なり、拭へば清くなる故也。

◎蝸角之爭

つまらぬ争を爲すと、蝸角の争と云ふ。諺章に、蝸牛の角の争ひり、世の墓

なまじりざるを喻ふ。莊子の則陽篇に曰く、有國千蝸之左角者曰觸氏、國千蝸之右角者曰觸氏、時相與爭地而戰、伏尸數万、逐北旬有五日、後反。蝸の蝸牛なり、蝸小にして兩角尤も小と爲す、俗眼より之を觀れば、小も大ならざるのなし、道眼より之を觀れば、大をして小ならざるのなし、天下の一蝸なり、梁國の小蠻なり、何を以て辨せんや。此句天下の英雄相争ふに喻ふ。白樂天の詩に、蝸牛角上争何事、石火光中寄此身、

◎群蟻羶は附く
成語考よ、衆の利は趨くを鄙むるを、群蟻附羶と云ふ。蘆桓の書よ、今人奔尺寸之祿、走絲毫之利、如群蟻附羶、聚蟻之投燭火、取不爲醜、貪不避死。

◎首よ畏れ尾よ畏る
書言故事に曰く、譬へば一身の如し、既よ其首よ畏れ、又其尾よ畏る、則ち其身中畏れざるもの餘る所能く幾何をぞ。左傳の文十七年よ、古人有言曰、畏首畏尾、身其餘幾。

◎荒唐之言

莊子の天下篇に曰く、以下謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不儻、漠然としてあてどなく、廣大にして、限りなき説と云ふことあり。

◎唇薄き者いよくものいふ

靈樞逆順肥瘦の篇に曰く、岐伯曰、瘦人者皮薄色少、肉廉然、唇薄經言、此諺

爰に出る也。

◎曠日彌久

ながくひまをる。

漢書の韓信傳よ曰く、情見力屈、欲戰不拔、曠日持久、糧食殫竭。史記の刺客傳に、太子曰、太傅之計、曠日彌久、心惛然、恐不能須臾。賈山傳よ曠日十年、註よ曠の空也、廢也。

◎口と面門と曰ふ

谷響集よ、客問、經中云、面門者、或爲面顔、或以爲口、何爲是耶、答、以口爲正、華嚴經よ云、即於面門衆齒之間、放佛刹微塵數光明、大疏よ云、面門即口。

◎口ハ機關きくわんなり

説苑の説叢篇に曰く、口ハ關也、舌ハ機也、言を出して當らざれば、四馬も追ふ能はざる也、口ハ關也、舌ハ兵也、言を出して當らざれば、反て自ら傷る也。

◎口として鼻はなの如くもらしむ

孝經の註、使口如鼻、終身勿事。鼻のものいわざる者されば、口を守ること、鼻のものいわざる如く、慎むべきを云。

◎回祿之災

火災を被むるを回祿と云ふ。左傳の昭十八年に、王産穰ニ火于之、ハハニフチ真回祿ニ註、玄冥の水の神、回祿ハ火の神。

◎活計くわつがい

恒に産業ありて樂む事を活計と云ふ。白樂天の詩に莫厭家貧活計微ナルチ註、活計ハ猶ほ生生之計と言ふが如し。東坡集に、開眼此心新活計。

◎苦集くす

くす。

俗になづみ苦しむ事を云ふ。瑯琊代醉編、心經の註に、苦謂一切生老病死之類、集謂一切聚、集骨、肉、財、帛之類、滅謂壞滅、道謂修行、此名四諦。經に云、見苦斷集因滅修道。

◎括囊くわつわう

だまつてゐる。

括囊との、囊を括くくるが如くに口を閉じて言を出さざるを云ふ。漢書の鄭弘傳、曰く、括囊不言、註、師古曰く、括囊との、自ら閉慎すること、囊の括結するが如き也。

◎過當くわたう

司馬遷報任安書に、所殺過當。文章軌範の註、所殺匈奴倍多、故曰過當。是れあたりまへより過たると云ふ事なり。

◎寛大くわんだい

漢書の宣帝記に、宣帝の詔曰く、務行寛大、順民所疾苦。是れ寛仁大度の事なり。諺草に、俗に、ゆるかせよわこりがましき人を、くわんだいも

のと云ふの、緩意の字あり、又寛意の字をも用ゆべし。魏書に云在州寛

◎偶語

類書纂要に曰く、偶語ハ、兩人對話するなり。唐詩ハ階蟻相逢如偶語、園

◎寓言

寓言とい、己の言を以て他の名を借りて言ふを云ふ。寓ハ寄也、俗につく

◎莞爾

微笑を云ふ。論語ハ、子之武城一聞弦歌之聲、天子莞爾而笑曰、割雞焉

◎潤達

後漢書の馬武傳ハ、潤達敢言、註ハ、大度也とあり。前漢書高祖紀ハ、豁達

◎倔彊

左太冲魏都の賦ハ出たり。通鑑集覽に云、倔通作屈、屈彊者、彊梁梗戾不

◎歡心

孝經ハ曰く、昔者明王之以孝治天下也、不致遺小國之臣、而況於公侯

◎刮目

故事成語考ハ曰く、世の近來徳を進むを稱して、士別三日當刮目相看と曰

◎魁偉

魁偉との魁の大也、偉の奇也、身長大卓異にして、倫を出るを云ふ。史記の留侯世家の贊に、太史公曰、余以爲其人計魁梧奇偉、至見其圖、狀貌如婦人好女、註に、應劭曰く、魁梧との壯大の意。後漢書よ、郭泰字林宗、性明知人、好獎訓士類、容貌魁偉。

●箝口 ものすはぬ。

莊子の田子方篇に、形解而不欲動、口箝而不欲言。漢書の爰盎傳に、君自閉箝天下之口、而日益愚。

●勸進 すゝめすゝむる。

文撰よ、劉越石が勸進表あり、是れ邪王睿よ、天子よあり給へとすゝめし表なり、然れば、すゝめすゝむると云ふ意あり。諺草に云、今俗に、乞食するを勸進するといふの意ちがへり、云云。

●株と守

人の愚に迷ふ事を株を守ると云ふ。韓非子よ曰く、宋人有耕田者、田中有株、兔走觸株折頸而死、因釋其耒而守株、冀復得兔、兔不可復得、

而身爲宋國一笑。

●口傳

孔安國書經の序よ曰く、濟南伏生年過九十、失其本經、口以傳授。韓文三十八、進順宗皇帝表云、今之所以知古不可口傳、必憑諸史。

●劬勞

詩經蓼莪の篇に曰く、哀哀父母、生我劬勞。劬の字彙に、疲勞なりとあり。諺草に、今俗よの、苦勞の字を用ゆ。

●工夫

諺草に云、日々人に雇はれて、賃を取る匹夫の事を云ふ。大工人夫諸職人の類皆これあり、王肅が傳よ、功夫とも書けり、學者も終日心を養ひ、道を脩ることを勤る故に、此工夫の二字を借り用ゆ、今俗に、思慮する事を工夫と心得ぬるのあし、工夫との唯勤むる事あり。

●公事

居家必用に曰く、私しなきを公と曰ふ、作爲する所あるを事と曰ふ。又禁

中一切の政務を公事と云ふ、書に何月公事とある是れなり。債權債務を法庭に争ふを公事と云ふ。後漢書の趙典傳、公事去官、是れ訴の事にいへり。公事の字の論語に出たり茲は省く。

◎果報 くわんぱう ひくひ。

法華經に、如是是因、如是是緣、如是是果、如是是報、是れ果報あり。

◎掛口端 カケクツノハシ

口のはしよかゝると云ふ事なり、齒にあらす。後撰の歌「あわれてふ事こそ常の口のはにかゝるや人をおもふなるらん」とあり。

◎頽墮 くつせり

源氏桐壺、くちかひしと思ひくつをる。河海抄に、頽墮と書けり。さり共と思ふ心の退屈するの頽落るが如し。

◎草臥 くたあれる

諺草よ云、俗に憊勞する事を草臥と云ふ、是れ山剌の入、峰修一行より起れる詞よして、今の平人の事にもいへり。

◎口猶乳くさし くちやちや

年少くして無知なるを云ふ。故事成語考よ曰く、口尙乳臭謂世人年少無知。漢書の高祖紀、口尙乳臭、註よ、師古曰く、乳臭とい其幼少を謂ふ。又吻、黄とも云ふ、世説よ、晋の僧深公曰く、黄吻、年少。

◎黄泉之客 くわんせん

三教指歸の鈔よ、黄泉の迷途なり。左傳の隱元年に誓之曰、不_レ及_ニ黄泉_一無_ニ相見_一也、註よ地中の泉、故に黄泉と云ふ、觸に曰く、生きて相見ること無きと言ふ也。

宮室官殿

◎黄閣 くわんかく

故事成語考に曰く、宰相職掌ニ絲綸ニ内ニ居黄閣。禮記に、子曰、王言如_シ絲、其出如_シ綸、丞相廳事門曰_ニ黄閣_一。

◎蝸廬 くわいろう

自屋の小なるを誦して蝸居蝸盧とも云ふ。魏志よ、焦光字孝然、結草盧河間、號三蝸牛盧、呻吟其中。

文學技藝

官様の文章

書言故事よ、朱夏英公以文謁盛度、度曰、予文章有傑氣、歐公云、文章兩等、有山、林、草、野、之、文、有朝、庭、臺、閣、之、文、山、林、之、文、其氣枯、朝、庭、臺、閣、之、文、其氣温、潤、王、安、國、嘗、曰、文、章、須、要、官、樣、

花樣同じぢらざ

成語考に曰く、花樣不同との文章の異なるを云ふ。書言故事に、時文別格、謂花樣不同

畫よ六法あり

事類全書の畫品よ曰く、畫有六法、一曰氣韻、生動、二曰骨力、用筆、三曰應物象形、四曰隨類賦彩、五曰經營置位、六曰傳移模寫。

薬人を殺さざ醫師人を殺す

東坡文集に云、蜀諺曰、學書者紙費、學醫者人費。

履新しと雖も冠と爲さざ

是の貴賤上下の差を亂るべからずといふ喻也。史記の儒林傳よ曰く、黃生曰、冠雖敝必加於首、履雖新必關於足、何者上下之分也、今桀紂雖失道然君上也、湯武雖聖臣下也。漢書の註よ、師古曰、語見太公六韜。成語考に曰く、尊卑序を失ふの冠履倒置に置くが如し。

勸學院の雀ハ蒙求を囀る

學問の甚だ盛んに、行のれし事に喩ふ。勸學院の藤原氏の學問所あり、日本後紀を考るよ、天長三年三月よ、藤原冬嗣始めて此の勸學院を立らる。拾芥抄に、勸學院の三條の北、壬生の西に在り、今其遺址を雀森と云ふ、そのかみ勸學院よて盛んに學問の行のれし時の、其近林よ居る雀までも、蒙求を囀りしといふ事あり、是れた、學問の甚だ盛んよ行のれし事をいはん爲めよ云ふ諺也、雀といふの、僕隸の名なり、又蒙求の呂望非熊といふ事を、黃鳥

の嘯りし杯といふの皆鑿說なり云云。笑苑千金に、雀讀論語。笑海に、紫燕讀論語百舌教之。」と見ゆたり。

◎句讀 くごう

類書纂要曰く、凡そ經書文を成し、語絶つ所、之を句と謂ふ、語未だ絶ずして文の以て誦咏に使ふるを點する、之を讀と謂ふ、句絶つれば則ち字の旁らウチよ點す、讀分れば則ち字の中間よ點す、是れなり。又曰く、意の絶つ所を章と曰ひ、言の断つ所を句と曰ふ。

◎薰陶 くわうたう

類書纂要曰く、薰陶の、教育に喩ふ也。宋史よ、今人善教其子弟者、必延名徳之士、使與之處、以薰陶成性。

器財雜具

◎皇國の樂器 くわうこく

琵琶。琴。和琴。以上を。日三弦。笙。笛。篳篥。以上を。日三管。太鼓。羯鼓。鉦鼓。

以上を
日三鼓

◎皇朝三部本書 くわうてう

舊事記、厩戸皇子、蘇我馬子奉推古帝敕撰凡十卷、自開關至當代。古事記、安萬侶奉元明帝敕撰、凡三卷、自神代至推古帝。日本紀、舍人親王、太朝安麻呂、奉天武帝敕撰、凡三十卷。

◎全六國史 ぜんろくこくし

日本紀、三十卷。續日本紀、四十卷。日本後紀、二十卷。續日本後紀、二十卷。文德實錄、十卷。三代實錄、五十卷。

◎關防の印 くわんぱう

葛原詩話に曰く、關防といひ、姦を防ぐと謂ふ義にて、大家の詩文、或は名家の墨蹟を、狡猾の輩、之を裂取るあらん事を恐れ、其全幅あるを證せんが爲め、首之を押す也、故に關防の印の、自己の手蹟に押すべきは非らず、然れども近世之を押すの意、必ずしも姦を防ぐに限らず、只だ端初を認むるが

爲めあり。五雜俎に、非^ニ其掌印^ニ而給者^ハ、謂^フ之^ヲ關防^ト、印方^ヲ而關防長^ク、以此爲^レ別耳。

草木花實

◎花中の君子 くわちゆう くんし はす。

成語考^ニ曰く、蓮花中君子、註^ス、周灑溪先生、極愛^シ蓮、稱^シ蓮爲^ニ花中君子^ト、言^フ蓮如^シ君子清芬粹美^ト也。周茂叔の愛蓮説^ニ曰く、菊花之隱逸者也、牡丹花之富貴者也、蓮花之君子者也。

◎花中の神仙 くわちゆう しんせん かいとう。

成語考^ニ曰く、海棠花内神仙、註^ス、唐相賈耽の百花譜^ニ云、以^テ海棠^ト爲^ニ花中神仙^ト。

通用雜錄

◎火急 くわきゆう しまい。

六祖壇經^ニ、火急速去^ト。又東坡集^ニ、應^シ須^シ火急回^ニ征掉^ト。劉詒の詩^ニ、州門符昨夜急如^レ火。

◎食へども其味と知らざ

大學^ニ、心不在^レ焉視而不見^ト、聽而不聞^ト、食而不^レ知^ニ其味^ト、註^ス、心存せざる事あれば則ち以て其身を檢^ムむることなし。

◎件

韻會^ニ曰く、説文件分也。諺草^ニ、旁^ニ牛を書く^ハ、牛の大なるものよして分やすき故なり、今箇條を分つを件といふ。

◎畫餅 むだごと。

魏紀^ニ、諸葛誕鄭^ニ颺等馳^シ名譽^ト、有^ニ四^ノ憲^ハ入^リ達^シ之^ヲ、謂^フ帝疾^ニ之^ヲ、詔^シ撰^シ舉^シ莫^クレ取^ルニ有名者^ト、如^シ畫^レ地作^ル餅^ト、不^レ可^ク啖^ス也。

◎九牛の一毛

物の多き中より少分を取る喩なり。禪林句集^ニ、四海一滴、九牛一毛。漢書の司馬遷傳^ニ、假^シ令僕伏^シ法受^シ誅^ス若^シ九牛亡^ニ一毛^ト。

◎口舌

史記蘇秦傳よ、周俗逐^テ三^ナ仕^テ二^ナ以爲^レ務^ト、今子釋^レ本^チ而事^ス口舌^ヲ。

や之部

天地時令

◎陽月

しふがつ。

陰曆の十月を陽月と云ふ。程子曰、十月謂^フ之^ヲ陽月^ト者、陽盡^{キテ}恐^レ疑^ニ于無^キ陽也、故謂^フ之^ヲ陽月^ト、言^フふの十月ハ極陰の月なるに、却つて陽月といふハ、極陰なるを以て人、陽盡きて無^キかと思^フハん事を恐れて、特^ニ之^ヲを陽月と云ふ、陰盡^キれば陽氣已^ニ萌^スすことを見^ル所以^{ナリ}なり。

◎夜月の名

三日月(三日の夜の月)上^ニ弦^ニ(七日八日)望^ニ月^ニ(十五日)十六夜^月(十六日)立^待月^(十七日)居待^月(十八日)寢待^月(十九日)廿日^月(廿日)下^ニ弦^ニ(廿一日)廿

三日(有明^月)(下旬^月也)一説云、自^ニ十四^日五^日以後^月未^レ没^ニ而夜既^ニ明^ニ、故^ニ所謂^ニ有明^者、十四^日五^日以後^月也。

◎養花天

はなぐもり。

古諺集よ、越中の國にて牡丹開く時、賞するもの親疎を問はず之を看花と謂ふ、此月多く輕陰微雨あり、之を養花天と謂ふ云云。

人倫人品

◎治郎

めかしごとこ。

治郎とは男子にして婦人の如く粧ひ飾るものを云ふ。又俗よ男色を賣るものを治郎と云ふ。韻會に、妖冶は女態也」とあり。

◎夜叉

おに。

名義集に云、此云^ニ勇健^ト、亦云^ニ暴惡^ト、西域記云、藥叉訛^ニ曰^ク夜叉^ト、飛^ニ騰^ス空中^ニ、什日、有^ニ三種^ト、一在地^ニ、二虛空^ニ、三夜叉^ト。譬喻品よ、夜叉惡^ク鬼食^ニ、斲^ル人肉^ヲ、共^ニ相殘害^ス、飲^シ血^ヲ、斲^ル肉^ヲ。

◎野心やしん なつかぬ。

左傳の宣四年よ、諺曰、狼子野心、是乃狼也、其可畜乎、秦氏の標註に、豺狼の子、心山野に在りて、馴れ服すべからず、之を養へば必ず人を害す」とあり。文撰の丘希範が書に、北狄野心、註よ翰曰く、野心といふ野獸の心の如きを謂ふ。諺草に豺狼の人に馴ざる如く、人臣の君よ背て弑奪の心あるをも野心といふなり。

◎羊質虎皮やちつこひ

成語考よ曰く、羊質虎皮とは、其文ありて實無きを譏るなり。書言故事よ、虎の皮を以て羊の身よ加ふ、虎皮の則ち文采あり、亦無學者の徒ら好衣冠あるが如き也。

人事身體

◎柳の枝よ雪折ハ無しやなぎのえだよゆきおれなし

人の壯健なるを云ふ。淮南子よ曰く、木強則折、革固則裂、齒堅於舌而

先之敝。口義云、木強則折、如藤如柳則難折。

◎藥石之言やくせきのげん ためになることば。

左傳の襄廿三年よ、臧孫曰、季孫之愛我疾也、孟孫之惡我藥石也。成語考よ、多蒙藥石、是謝人之箴規也。唐書に、高季輔上封事、帝報以鑽乳一劑、曰、卿進藥石之言、故以藥石報之。

◎野人芹と獻ぼるの意やじんせりとけんぼるのい

人よ物を送るよ、自ら之よ過ぎたるもの無しと誇りし喩なり。書言故事に曰く、物を送るを、聊效野人獻芹之意」とあり。成語考に、謙送禮、曰く、獻芹也。翰墨全書に曰く、敢效獻芹之意、芹子是將得賜此留、實爲幸榮。列子よ、昔者宋國有田夫、常衣緇屨、僅以過冬、暨春東作、自曝於日、不知天下之有廣廈、隙室、綿纈、狐貉、顧其妻曰、負日之暄、莫知者、以獻吾君、將有重賞、里之富室告之曰、昔人有下美我、我甘、泉莖、芹、萍、子者、對鄉豪稱之、鄉豪取而嘗之、螫於口、慘於腹、衆晒而怨之、其人大慙、子此類也。呂氏春秋に、陸佃云、芹一名水、英潔白有節、其氣芬芬

而不^レ如^カ尊^ノ之美^ニ。

○闇夜^{やみよ}のにしき

無用なる事の喩なり。漢書に曰く、富貴不^レ歸^ニ故郷^ニ、如^シ衣^テ錦夜^チ行^カ。蘇武書に、語曰、夜^ニ行^ク被^レ繡^カ不^レ足^ニ爲^ル榮^ト。

○約束^{やくそく}

漢書の高帝紀註よ、約は要也、書契を謂ふ也。史紀の曹參世家に出たり。小補韻會に曰く、言語要^一結^一戒^一令^一檢^一束^一、皆曰^ニ約束^ト、約又音要、束又商遇切、字義同。諺卿に、約束との詞を以て互にく^レりたる如く、かたむる意あり、歌の詞よもあり。やくそくもたかわざらめや桐の葉をさざみし事もある世なりせば」とあり。

○良久^{やいひなほ}

史記の韓信傳よ出たり。後漢書の張湛傳よ、良久^フ歎息^ス、註に良^ハ猶^ハ甚^ニの如し。

○約諾^{やくだく}

しやうち。

字彙に、諾承領之辭也、又以^テ言^ヲ許^ス人曰^フ諾^ト。約の約束の所に詳し、約諾のうけはるとよめり。

○藥袋^{やくたし}も無し

或説よ、荆軻が秦の始皇を刺んとせし時、群臣の殿上よ待りし者の、秦の法にて、手よ尺寸の兵器も持ざれば、せんすべなし、侍醫夏無且^ウ、其持^ツ所の藥囊を以て、荆軻に投^ゲたり、其事史記よ詳し、此時夏無且藥袋よても手に持し故、わづかに、荆軻に手向ひたり、藥袋もなくんば、一向に手を空しくすべし、故よ物の詮なき事を藥袋も無しと云へり。

○養由^{やうじゆ}よ弓^ユと弓^ユと

淮南子に曰く、養由^ユ、基楚將^ヲ、善射^シ、去^リ揚葉^ニ、百步射^シ之^ヲ、百發百中^シ、楚恭王獵^ス、見^テ百猿^ヲ、遠避^リ、箭^ヲ、王命^シ由^ニ基^ニ射^シ之^ヲ、由基始^メ調^ヒ弓^ヲ、矯^メ矢^ヲ、未^ダ發^ス、乃抱^リ樹^ニ而號^ス。諺卿に、俗諺の起、爰よ出たり、かゝる射術の達人に對して、弓の事をいふの、却りて笑を取るの媒也、世の人、曲藝小技あれば、精妙の術を僭し雲泥の隔^ハある事知らず、誠よ養由よ對して弓をいふの類也。

文學技藝

◎柳は綠花ハ紅ヤチヤチ 緑花ハ紅

自然の姿を柳綠花ハ紅と云ふ。虚堂錄よ、尺長寸短。人天眼目よ、天高海潤。禪林類聚よ、烏黑鷲白松直棘曲。又火暖水冷。是れ皆柳綠花ハ紅と意同じ。

禽獸蟲魚

◎守宮ヤモリ

漢の武帝の時、端午の日を以て蜚蜋を取て、之を器よ置き、飼ふよ丹砂を以てし、明年の端午よ至りて、之を搗ぶき以て官人の臂よ塗る、犯す所あれば、消没す、爾らざれば則ち赤痣の如し、故に守宮の名を得たり。李賀の詩に、玉曰夜搗紅守宮、事文類纂に、李商隱曰く、巴西夜市紅守宮、後房點臂斑々紅。

通用雜錄

◎漸佳境ヤチヤチ 佳境よ入る

晋書よ、顧愷之每食甘蔗、常自尾至本、人或怪之、愷之曰、漸入佳境。成語考に、將近好處、曰漸入佳境。

之部

天地時令

◎味爽マイソウ

書經の太甲の上篇に出づ、註よ、味の晦、爽の明也、味爽といふの、明んと欲して未だ明けざるの時あり。

人事身體

◎盲龜の浮木メイキウのウキ

稀れにも遇ひ難き喩なり。法華經よ、佛難得、值如優曇波羅華、又如一
眼之龜、值浮木孔。莊嚴經に云、有一小兒、聞佛說、人身難得、如育龜、
值浮木孔、小兒穿板作孔、置池水中、以頭出入、終不能入、曰、盲龜在
百年一出、何日值耶、我今爲人有面目、一日百出、值木孔、猶難。又涅槃
經よ詳かなり。

◎曲らねば世も立れど

世説に曰く、王亮祿、如屏風、屈曲從俗、能蔽風露。王亮祿が傳の南史よ
在り是れ諺の意と同じ。

◎又一秦を生じ

かたきをふやす。

又一秦を生ずとの、一の仇を増すと云ふ。史記の張耳傳よ曰く、陳王大怒
欲下盡族、武臣等家而發兵擊趙、陳王相生房君諫曰、秦未亡而誅武臣
等家、此又生一秦也。

◎蒔ぬ種ハ生ぬ

俗諺よ云、李を種て桃とならず、禾を種て豆を生せず。山谷頤軒の詩に、涇

一流不濁、涇種桃無李實。是れ異域同談也。

◎満ハ損と招き謙ハ益と受く

人盈れば虧き謙めり益を増すと云ふ意あり。老子に曰く、江海所以能爲
百谷王者、以其善下之、故爲百谷王。書の大禹謨に曰く、満招損謙受
益、時乃天道。

◎枕と高くして臥す

卓氏藻林に曰く、高枕而臥、との無事なるを云ふ也。史記の張儀傳に、張
儀説魏王曰、爲大王計、莫如事秦、事秦則楚韓必不敢動、無楚韓之
患、則大王高枕而臥、國必無憂。

◎將を奪はんとすれば之と與ふ

勞せずして陰謀を行ふを云ふ。老子に曰く、將欲歛之、必固張之、將
欲弱之、必固強之、將欲廢之、必固興之、將欲奪之、必固與之、是謂
微明。

◎マウリヤヘル罷歸

史記の公孫弘傳より出たり。漢書より、宣帝甘露三年二月、單于罷歸。又高祖紀に、兵皆罷歸家。禮記の少儀に、燕遊曰歸、師役曰罷、陳註に、師役の勞苦甚しと爲す、故より其還るに於て罷と曰ふ、其疲れるを以ての故あり。是を以て見れば、罷歸るといふの、軍行の歸る時より云ふ詞ならじ、然れ共史記より出たるの、軍行の歸るを云ふにあらす、今常にいふ詞となれり、罷出といふのいふ間敷事や、されど昔しより誤りて言來れば今更改め難し、万葉集に、退出の字を用ゐたり、退の字を用ゐるは誤り非らず、万葉集の歌より「もゝしぎの大宮人のまかり出てあそふ今宵の月のさやけき」とあり。

◎マニク隨意

萬葉集の訓なり、意に任する義なり。古詩に、隨意殘花寂寂開、庭艸無人隨意綠。

◎マイマシ每每

莊子の胠篋篇に、天下毎毎大亂、註に、毎毎常常也。

◎マホル參

廣韻に、覲也、謁也、又干與也。日本紀より、遠自來參。諺草より、諸人を集めて開示するを參と云ふ、是れ聖凡僧俗相交る義を取れり。

草木花實

◎マツ松と太夫と號す

書言故事に曰く、松を謂て太夫と曰ふ。成語考より、松號太夫。史記の始皇本紀に、始皇上泰上、風雨暴至休于松下、因封其松爲五太夫。

通用雜錄

◎マニハツ間髪と容ぞ

事の急より臨んで少しも間なき機を云ふ。説苑の正練篇より曰く、其出不出、間不容髪、註より、甚だ急なるを言ふ也。

◎マウ網羅

よくあつめる。

三略曰く、夫所謂士者英雄也、故曰、羅其英雄、則敵國窮、註よ、其英雄を網羅して之を用ゐる時の、則ち敵國窮困す。漢書の司馬遷傳よ、網羅天下、下放失舊聞、考之行事、稽其成敗興壞之理。王莽傳よ、網羅天下、異能士、至者前後千數。

◎枚

物を數ふる數の名なり。説文に、徐曰、條自枝而出也、枚自條而出也、枝曰條、幹曰枚、王氏曰、凡數物曰枚、數事曰條。俗よ、紙の類を二枚三枚といふの、物を數ふるあり、下知法度を第何條又の條々と云ふの、事を數ふる也。歌書にも一枚二枚をひとひら、二ひらとよび、日本紀、神武紀にも、八十枚とあり。

◎まだき

まだきといふ、はやき意也。速の字を書き、朝まだき杯と云ふの、朝速さを云ふ、歌林良材にも、同じくはやき意とあり、古今集に「我袖よまだき時雨のふりぬるの君が心に秋やこぬらん」とあり。

げげ之部

天地時令

◎犬牙之地

うりぐみちの

犬牙の地といふ、地形犬の牙の如く相交りたるが如くなるを云ふ。史記の孝文本紀の註に、子弟を封じて境土交り接す、犬の牙正しく相當らずして相銜み入るが若き也。

人倫人品

◎逆鱗

天子の怒りを逆鱗と云ふ。韓非子の説難篇よ曰く、夫龍爲蟲也、柔可狎而騎也、然其喉下有逆鱗徑尺、若人有嬰之者、別必殺人、人主亦有逆鱗、説之者、能無嬰人主之逆鱗、則幾矣。龍の人君の象なり、故人主の怒よ逢ふことを逆鱗は觸るといふなり。

◎縣令と明府と云ふ

蘇氏演義曰く、府の聚也、在る所の圖籍簿書を聚るの所あり。風俗通に云、公卿牧守通徳の聚る所なり。類書纂要よ、大守縣令を稱して皆明府と云ふ。吾邦よて左大臣を左府と曰ひ、右大臣を右府と曰ふの類、皆是れに因る。

◎兄弟牆は鬩ぐ

詩經の小雅よ曰く、兄弟鬩于牆、外禦其務、每有良朋、烝也無戎、言ふことるの、兄弟若し不幸よして、内よ鬩諍するに至ることあるも、外他人の侮の同心協力して之を禦ぐ、良朋ありと雖も豈能く助くる所あらんや、牆とハ壁のことよて家の内といふ爲め也。左傳の僖二十四年に、富辰曰、兄弟雖小怨、不廢慈親、註に、慈美也。

◎兄弟は手足爲り

莊子に曰く、兄弟爲手足、夫婦如衣服、衣服破時更得新、手足斷時難再繼、得難きの兄弟あり、夫婦の衣服の如く破るゝ時ハ、又新よす、婦死すれば新

婦を迎ふる也。

◎兄たり難く弟たり難し

物に優劣なきを難兄難弟と云ふ。成語考よ曰く、元方季方の俱は盛徳、祖太邱稱して兄たり難く弟たり難しと爲す。世説よ、陳元方、子長、文有英才、與季方、季方、各論其文功德、爭之不能決、諮于太邱、曰、元方難爲兄、季方難爲弟、箋註に、元方の兄と爲り難く、季方の元方より弟と爲り難し。

◎賢よ任せざれば國虛し

孟子に曰く、不任仁賢、則國空虛。漢書に、任賢必治、任不肖、必亂、必然之道也。家語に、子路問於孔子曰、賢君治國所先者何在、孔子曰、在於尊賢、賢不肖、子路曰、由聞晉中行氏尊賢而賤不肖、其國亡何、孔子曰、中行氏尊賢不能、用賤不肖、弗能去、賢者知不用己而怨之、不肖者知其必賤己而讐之。邦俗の諺よ、賢者の愚者を制する爲めに生る。

◎傾城 傾國

傾城傾國との皆美人の賞稱なり、邦俗之を借家の淫女よ用ゆることよなれり。漢書の外戚傳よ曰く、李夫人本以倡進、初夫人兄延年性知音、善歌舞、武帝愛之、每爲新聲變曲、聞者莫不感動、延年侍上、起舞歌曰、北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國、寧不知傾城與傾國、佳人再難得、上嘆息曰、善、世豈有此人乎、平陽主因言、延年有女弟、上乃召見之、實妙麗、善舞、由是得幸、生一男、是爲昌邑哀王。成語考に曰く、婦容嬌媚、實可傾城。

◎桀を助けて虐を爲す

書言故事よ曰く、相黨して惡を爲すと、桀を助けて虐を爲すと曰ふ。史記の留侯世家に、沛公入秦宮、宮室帷帳狗馬重寶婦人以千數、意欲留居之、樊噲諫沛公、出舍、沛公不聽、良曰、夫秦爲無道、故沛公得至此、今始入秦、即安其樂、此所謂助桀爲虐。

◎劍落ちて船を契む

愚かなる者の喩へ也。呂氏春秋に曰く、楚人劍自船中墜水、遽契其船、曰、是吾劍所從墜也、舟已行而劍不行、不亦惑乎、註に、昔し楚の國に愚かなる者あり、舟に乗て行くに、誤りて腰に帯びたる劍を水中に落したり、ハツト思ひ遽かに舟の傍らに契を附る、人其故を問ふ、答へて曰く、是れ我が劍を落したる所よ契を附け置くの、重ねて取り上ん爲めなりと。傳燈錄よ曰く、罕逢穿耳客、多遇刻舟人。

◎經濟之才

經濟の才とい一國の財政より下、一家の出納に至る迄、苟くも金錢貨物の出入を整理する伎倆を有したる者を云ふ。類書纂要よ曰く、稱人才、曰經濟之才、謂經邦濟世之才也。

◎輕薄者

威儀輕々しく徳薄き者を輕薄者と云ふ。後漢書の馬援傳に、援戒其子姪曰、效杜季長不得、陷爲天下輕薄子。杜子美の貧交行に、紛紛輕薄何須

顯證レ數

居家必用に曰く、顯證謂下知見爭端之人也。又陳遵曰く、左旁知レ狀謂ニ之見證。諺草よ、今も鞠杯の時、旁らにて見る證人を顯證と云ふ。

權柄

たもきひと。

權の秤の錘なり、柄の斧の柄なり、何れも專要の所なれば、上に在る人を喻て云ふ也。前漢書の劉向傳よ曰く、大臣操ニ權柄一持ニ國政。六韜の文韜守土篇に曰く、無レ借ニ人國一柄、借ニ人國一柄、則失ニ其權。

元元

じんみん。

元元との人民を云ふ。史記の文帝紀に、以全天下元元民、註よ、古への人を謂て善人といふの、善に因りて元と爲す、故よ黎元と曰ふ、其元元と言ふ者の一人に非ざる也。

荆布

わたくしのかな。

自分の妻を稱して荆布と云ふ、拙荆荆妻など云ふも同意義なり。書言故

事に曰く、自稱妻曰ニ荆布、漢梁鴻妻孟光、狀肥醜而黑、力舉石曰、德行甚高、擇對不嫁、年三十、父母問其故、曰、欲節操如梁鴻者、鴻遂娶之、常荆叙布、每進食、舉案齊眉。西人ベールコン曰く、妻の少年の戀人、中年の夥伴、老年の養護者なり。又ハーパート曰く、妻子を有する人の指を咬へて坐すべからず。又曰く、妻子を有する人の幸運は人質を與へたる也、何となれば彼等の、是非論なく、大事業を爲すの妨碍物なればなり。

下子

げしう。

共に賤しきもの、事を云ふ。枕草紙に、すきくしからん下手。源氏黨木の巻よ、けしうのあらねど。不下習と書く、下手しくあらぬあり、又怪敷と書てあやしむところあり。

眷屬

いちもん。

法華玄義よ曰く、父母遺體、攪世成身、得爲天性、性親愛、故名眷、更相臣順、故名屬。普觀記に曰く、眷屬也、屬續也、謂恩相連續也。眷屬の單だ骨肉を分つ者のみを稱するよ非らず、凡そ恩顧ありて、相從ふ者の、皆

眷屬あり

○獻替 よしあしとまふす。

文撰の三國名臣序贊の註に、向曰く、出て入の將帥と爲りて、事を勤めて功有り、入ての則ち其可否を獻替す。獻の進也、替の廢也、善曰く、國語よ、史一黯謂趙簡子曰、夫事君者、諫過而賞善、薦可以替否、獻能而進賢。

○警蹕 ねささばらひ。

周禮の頁官に、隸僕掌蹕ニ宮中ニ之事ヲ註し、行を留むる者を云ふ、漢よか以來、天子出るよ警を稱し、入るに蹕を稱す。又古今註よ、曰く、行徒を戒むる所以なり、周禮よ、蹕して警せず、秦の制に、軍を出る者の、皆警戒す、國よ入る者の、皆な蹕止す、故よ出警入蹕と云ふ、一よ曰く、蹕の路なり、行く者の皆な塗路よ警むを謂ふなり、蓋し周の制に始まる。

○閨秀 せんのかしこきもの。

成語考に曰く、閨秀と曰ひ、淑媛と曰ふの、皆な賢女を稱する也。晉書に、濟滌曰く、王夫人神情散朗、故有林下風氣、顧家婦清心玉映、自是閨房之秀。

○乾淳の三先生

朱子、名熹、字元晦。張南軒、名栻、字敬夫。呂東萊、名祖謙、字伯恭。是れ乾淳の三先生あり。

人事身體

○毛と吹て疵と求む

毛の中迄も吹き尋ねて疵を求むるの、苛察を云ふ也。漢書の武帝紀に、推抑諸侯王、奏其過惡、吹毛求疵也、應劭曰く、求索多端曰吹毛求疵。劉子の傷讒篇に、洗垢求痕、吹毛覓瑕。韓非子に、不吹毛而求小疵、不洗垢而察難知、不引繩之外、不推繩之內、不急法之外、不緩法之內。成語考よ、小過必ず察す、之を吹毛求疵と謂ふ。後撰の高津内親の歌よ「直き木にまかれる枝も有ものを毛を吹きすをいふかじりかき」とあり。

○慶雲之瑞

慶雲或ハ景雲又或ハ卿雲ト作る、皆是れ太平の應なり。史記の天官書曰く、若シ煙非シ煙、若シ雲非シ雲、郁郁紛紛、蕭索綸困、是謂卿雲、卿雲見、喜色也。孝經援神契曰、王者德至三山陵、則景雲出。漢書の禮樂志に、甘露降、慶雲集。

◎今日は人の上、明日は我身の上

平家物語曰、惡源太義平、死に臨んで、平家の士ト對して云ふたる詞なり。新古今、加賀少納言の歌曰「あき人を忍ぶることもいつ迄とけふのあはれにあすの我身を」とあり

◎言行は君子の樞機

易の繫辭上傳曰、言行君子機、樞機之發、榮辱之主也。漢書の佞幸傳曰、尚書百官之本、國家樞機、宜以通明公正處之。樞ハクル、戸の開閉の下ニ在る竅を云ふ、機ハ弩のヒキガチ弩の張弛ハ此機に因る、故に事の要を樞機と云ふ。關尹曰く、言美なれば、則ち響き美なり、言惡なれば、則ち響き惡あり、身長ければ、則ち影長し、身短かければ、則ち影短し、名ある者の影な

り、故曰く、爾が言を慎めば、將よ之を和ぐるあり、爾が行を慎めば、將よ之に逢ふ也。

◎懸河之辯

のうへん。

雄辯にして水の流るゝが如きを云ふ。晋書の郭象傳に曰く、郭象字子玄、少有才理、好老莊、能清言、太尉王衍每云、聽象語、如懸河瀉水、注而不竭。

◎雞口牛後

是れの大なる者の尾に附くよりも、小なる者の頭とされと云ふ喩なり。成語考曰く、大丈夫の寧ろ雞の口とあるも、牛の後とある勿れ。史記の蘇秦傳曰、蘇秦說韓宣惠王曰、臣聞鄙諺曰、寧爲雞口、無爲牛後、今西面交臂而臣事秦、何異牛後乎、夫以大王之賢、挾強韓之兵、而有牛後名、臣竊爲大王羞之、正義に曰く、雞の口小なりと雖も、尙は食を進む、牛の後大なりと雖も、乃ち糞を出す也。

◎刑鞭蒲朽

小野の道風が詩よ、刑鞭蒲朽空去、諫鼓苔深鳥不驚。是れハ劉寛が蒲鞭の故事を用ゐて無爲にして治る事を作れり。或ハ曰ふ大江朝綱の詩なりと。

◎今日か明日か

人の老境に及んで殘齡の程無きを云ふ諺なり。家集よ、「人の世の老をはてにしせましかばけふかあすかもあけかさらまし」とあり。

◎犬馬之年

卓氏藻林よ曰く、犬馬之年とい、自ら其年を稱す、故に卑賤に従ふ也。唐詩よ、空催犬馬年。

◎犬馬之養

不敬の罪を、犬馬の養と云ふ。論語の爲政篇よ曰く、今之孝者、是謂能養。至犬馬皆能有養、不敬何以別乎。註よ、胡氏曰く、世俗親よ事ふ、能く養ひ足る矣、恩よ狎れ愛を恃んで其漸く不敬よ流るゝを知らずんば、則ち小失に非ざる也。

◎徑庭

ねはちがひ。

徑庭との彼此の段階を異にするを云ふ。莊子の逍遙遊篇よ曰く、太有ニ逕

庭ニ近ニ人情ニ註よ、隔遠の貌。

◎懸隔

おほちがひ。

遙かに隔りたるを云ふ。史記の高祖本紀に曰く、秦形勢之國、帶ニ河山之

險、懸隔千里。

◎業業

ねはひ。

詩經よ出たり、註よ云、業業大也。諺草に、俗よ物の多きをげふくしきと

いふは此字なり。

◎見解

けんかい

字彙よ云、解釋也、曉也、道理を見て、さとる所を見解と云ふ。鶴林玉露よ

曰く、曾點之見解、顔子之工夫。

◎誼諱

ぎんくわい

物のかしがましき事を云ふ。文撰の左太冲蜀都賦よ曰く、誼諱鼎の沸くが

如し、諺草に云、今俗に争鬪するを、誼譁といふの、物いひ争そひて、かま

◎嚴密

蘇易簡の翰林志に、今二京、學長院、並在二樞密之北、蓋表二其深潛嚴密一焉。

◎逆旅

やじや。

客舍を逆旅と云ふ、逆の迎也、旅の客を迎ふるの義なり。左傳の僖二年、今虢爲二不道、保二逆旅、以侵二敵邑之南鄙、註に、逆旅の客舍なり。莊子の山

◎軒輕

あげさげ。

軒輕との輕重といふも同じ。成語考よ曰く、事有二低昂、曰二軒輕。詩の小雅六月篇に、戎一車既安、如二輕如二軒、註に、輕の車の覆ふて前む也、軒の車の却さて後る也、凡そ車後より之を視れば輕の如く、前より之を視れば軒の如し、然して後よ適調する也。後漢書の馬援傳よ、前車不能令二入軒、後車不能令二入軒。

◎雞肋

雞肋よ二義あり、一の無用なれども棄るよ惜む可きに喩ふ。後漢書の揚修傳よ曰く、揚修爲二主簿、時操既平二漢中、欲二討二劉備、不得二進、欲二守之、又難二爲二功、護軍不知二進止、操出二教、唯曰二雞肋、外曹莫二能曉、修曰彼雞肋食之則無二所得、棄之則如二可惜、公歸計決矣。又自ら體の弱きに喩ふ。世説に、晋劉伶嘗醉、與二俗人一相忤、其人攘二袂奮二拳、伶曰、雞肋不足二以安二尊拳、其人九笑而已云云。

◎結構

文撰の靈一先殿賦よ、觀二其結構、規矩應二天、註に、善曰く、呂氏春秋の註に、結の交也、構の架也。諺草に、結構といひ、むすびかまゆるとよめり、今俗に、物の美事を、結構と云ふの誤り也、結構のよきあしきといひふべし、直に結構を指して、物のよきことといひすべからず。

◎血食

國語よ、社稷血食、註よ、血謂二牲牢。昔し支那にて、宗廟の靈を祭るに、

牛羊豕の肉を以てせり、故に血食せずとあるとき、國家亡びて祖先の廟
を祭る能わざるを云ふ。

● 驗 けん けじめ。

史記の秦の二世紀に曰く、趙高欲^ス爲^シ亂、恐^レ群臣不^レ聽、乃^チ先^ニ設^ク驗、持^シ鹿^ヲ獻^ス于^ニ二世、言^フ馬也。伊勢物語に、驗の字をけじめと訓せり、又源氏繪木の
卷に、結目掲目等と書けり。

● 險阻 けんそ

左傳の僖公傳に、險阻艱難備嘗^ニ之矣。朱子の曰く、險與阻不同、險是自
上視^レ下、阻自^レ下觀^レ上。韻書に、山の巖を險といひ、水の隔るを阻と云
ふ。諺草に、若し廣くいはゞ、山水皆通すべし、大行の路、巫峽の水も、人心
の反覆の中に在る故に、人の心の常なきをも或の險阻といへるなるべし。

● 恠瑕 恠事 けあ けち

思ひ設ずして疵を被^ハひるを恠瑕と云ふ。非事のことをけちと云ふ、此字な
り。

● 儉約 けんやく

史記の龔遂傳に、遂爲^ニ渤海太守、躬率^テ以^テ儉約。帝範に曰く、儉以養
性、靜以脩身、儉則民不^レ勞、靜則下不^レ擾、民勞則怨起、下擾則政乖。瑣
碎錄に曰く、一人儉、一家富、王者知^レ儉天下富。儉約の字、論語に本づく
雖も二字つゞきていなし。石田興長曰く、家を修むるに、儉を以て本と
す、其本立てば、即ち奢侈の心去り、自^ラから父母の心を安んずるを得べし、而
して我餘財を以て、孤兒寡婦を惠まば樂み亦大ならずや。板倉重矩曰く、
儉の無用の費を省きて以て有用の費に充つ、故に人の爲すべき所なり。駱
克曰く、儉の靜寧の基なるのみならず、亦た仁惠の源なり、何とされば自ら
助くる能わざるもの、他人を助くべき様をければなり。

宮室官殿

● 經始 經營 けいし けいぎやう

成語考に曰く、土木方に興るを經始と云ふ。類書纂要に、經の量度也、營

の謀爲也、又曰く、經の其創造の基を定むる也、營の其向背の宜きを正す也。

◎教坊

事物紀原に曰く、唐三官志曰、開元二年置於教坊蓬萊宮、側、京都置左右教坊、掌俳優雜劇、續事始曰、玄宗立教坊、以新聲散樂之曲、優倡蔓衍之戲、因其諧謔、以金帛帝綬賞之、因置使以教習之、國家乃以伶人之久次者爲使云、

文學技藝

◎螢雪の功をつむ

晋書、胤字武子、幼恭勤博覽、貧不常得油、夏月以練囊盛數十螢、火照書讀之、以夜繼日、後官至尚書郎。孫氏世錄曰く、孫康家貧、無油、常映雪讀書。この二人の故事に依りて、勤苦して學問するを螢雪の功を積むと云ひ習ひせり。

◎玄學

老子及び莊子の學を玄學と云ふ。神仙傳、老子當三皇時、爲玄中法師。老子に、無名天地之始、有名萬物之母、此兩者、同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門云云。

◎形而上

易の繫辭上傳に曰く、形而上者、謂之道、形而下者、謂之器。後傳に、有形の皆器也、無形の道と爲す。とあり故に形而上といふ無形と云ふこと也。

◎賢、賢易色

論語、子夏曰、賢、賢易色、事父母、能竭其力、事君、能致其身、與朋友、交言有信、雖曰未學、吾必謂之學矣、註、人の賢を賢として、其色を好むの心に易ふるの、善を好むと誠有る也。

◎藝ハ身を助くる

韓退之の進學解に曰く、名一藝者、無不庸。諺此に本づく也。

◎瓊枝栴檀

藝林伐山故事に、佛經云、瓊枝の寸寸是れ玉、栴檀の片片皆香し、註よ、之を聖賢よ比するに、徳の備へらんこと無らんことを欲し、之を詩文に喩ふるよ、字の工ならざることを無からんことを欲するなり。

◎稽古

此の字書經の堯典に出たり、稽の考也、能く古道を考へて之を行ふ。後漢書の桓榮傳に曰く、桓榮爲太子少傅、賜輜車乘馬、榮大會諸生、陳其車馬印綬曰、今日所蒙、稽古之力、可レ不勉哉。事類全書よ、王廻質開元十年、拜集賢院學士、仍侍讀、及壽王通、孝經、賜束帛酒饌及床褥衣被等、令廻質坐床上、羅列所賜物、金吾奉歸其家、里巷觀者如堵、家人迎門、歡譟皆歡曰、稽古之力、信不虛也。

◎啓發

論語の述而篇よ、子曰、不憤不啓、不悱不發、註に、憤の心通せんことを求めて未だ得ざるの意、悱の口言のんと欲して未だ能ハざるの貌、啓の其意

を開くを謂ふ、發の其辭を達するを謂ふ。

◎硯田

ものかき。

文事を以て生活するを硯田を耕すと云ふ。唐人以硯爲良田、舌耕而筆

耕云云。蓋し之より出づ。

◎奎運 奎文

奎の星の名なり、文運を奎運と云ひ、奎星を文昌星と云ふ。書言故事よ奎の西方の宿、凡そ十六星、文章を主管す。孝經の援神契よ、奎主文章、註よ宋均曰く、奎、星屈曲相鉤、似文章之畫。

◎警策

文撰よ、陸機の文賦に曰く、立片言而居要、乃一篇之警策、註に、良曰く、片善の言を立て、以て要節よ居く、乃ち能く警策と爲す、警の驅動の貌、策の以て馬を撃く可き者、片善の言、一篇を光益すること、亦猶は策を以て馬を撃ちて、其警動を得るが如き也、善曰く、文を以て文に喩ふ也。

◎藝

韻會よ云、藝ハ種る也、又才能也。漢書の註に、師古曰く、六藝而謂之六藝、藝猶種也、學者用ニ功於六藝、猶農者用ニ功於種藝。技能を藝といふも農夫の力を藝種に用る如く、事ハ鍛練する意なるべし。

◎稽首 稽顙 共にねじぎと云ふ。

釋氏要覽に曰く、稽首ハ頭を屈して地に至るを云ふ、稽ハ首地に至りて少時稽留するを謂ふ、此れ即ち周禮九拜の初拜也。又曰く、稽顙ハ、顙ハ額なり額を屈して地に至るを謂ふ、即ち周禮の第五の拜也。荀子の大略篇よ曰く、平衡曰拜、下衡曰稽首、至地曰顙顙、註よ、平衡とい頭と腰と衡の平かあるが如し。

◎熒惑 まよはせる。

史記の孔子世家に曰く、匹夫而熒ニ惑諸侯ニ者罪當ニ誅。六韜の豹韜少衆篇よ、太公曰、妄張ニ詐誘、以熒ニ惑其將、迂ニ其途、令過ニ深草、遠ニ其路、令會ニ日暮。

◎檄

説文に曰く、木簡よ書を爲り、長さ尺一寸、用ゐて以て號名す、若し急あれハ則ち鷄羽を挿みて之を遣る、故よ之を羽檄と謂ふ、言ふこゝろハ飛の疾さが如き也。史記の陳豨傳よ、吾以ニ羽檄ニ徵ニ天下兵、註よ、鳥の羽を以て檄書に挿む、之を羽檄と謂ふ、其急速なると飛鳥の若くかるに取る也。

器財雜具

◎褻晴

野桃に云、褻ハなれたる義也、晴ハ法禮の義也。常よ着るものを、けごるものと云ひ、朝服禮服を晴衣と云ふ。詩經の葛覃朱傳よ、私燕服也、衣禮服也。私を毛の衣とよみ、衣をはれさぬとよめり。韻會に、説文褻私服。又衣の破れたる餘りをも褻と云ふ、衣服に限らず、公界を晴と云ふ、故に私事を褻の事ともいふなり。職原抄に、晴時雖ニ下臈ニ着レ之。

◎警枕

書言故事よ曰く、宋の司馬温公、圓木を以て警枕を爲る、纒かに、睡れば則ち

枕轉じて覺む、乃ち依て書を讀む。通鑑の後梁紀、錢繆自少在軍中、夜未營寐、倦極則就圓木小枕、或枕大鈴、寐熟輒歎而寤、名曰警枕。

通用雜錄

權輿 はじめ。

詩經の秦風權輿篇、朱子の註に云、權輿の始め也、華谷嚴氏曰く、衡を造るは權より始め、車を造るは輿より始む。晋書の禮志に、天地更始、萬物權輿。

ふぶ之部

天地時令

普天之下率土之濱

詩經の小雅、普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣、註、土の廣さ

臣の衆さと言ふ也、率の循、濱の涯也。

不毛之地

境埒にして五穀の生せざる地を不毛の地と云ふ。孔明の出師表に曰く、五月渡瀘入不毛、註、不毛の草木を生せざる地。史記の鄭の世家に、哀不忍絶其社稷、賜不毛之地、使復得改事君王、孤之願也、註に、境埒にして五穀を生せざるを不毛と曰ふ、謙して敢て肥饒を求めず。

附庸

つけしろ。

小國を附庸と云ふ、禮記の王制に曰く、天子之田方千里、公侯之田方百里、伯七十里、子男五十里、不能五十里者、不於天子附於諸侯、曰附庸、註に、此れ天子諸侯、田里の廣狹を言ふ、不能といひ、猶は不足の如き也、不於天子といひ、王の聚會に與からざる也、民功を庸と曰ふ、其功勞大國に附きて而して天子に達す、故に附庸と曰ふ、天子以下皆田を言ふて地を言ひざる者、地の山林川澤原濕險夷の不同あるを以てなり、若し限るは地里を以てして田里を計らざるとさへ、則ち井地均しからず、穀祿平かなら

す。

◎扶桑

にはん。

扶桑との我日本國の異名なり。齋藤拙堂の文より曰く、上古有扶桑樹、考其所在、蓋當豫之地、傳曰、其高不知幾百仞、其大蔭翳數州、屹然爲大八洲之鎮、西土之人尙能言之、散見淮南山海諸書、遂爲我國別號。

人倫人品

◎武士と武弁と曰ふ

故事成語考より曰く、武士を武辨と曰ふ、註は辨の巾也、巾の乃ち首服、士の衆卒の頭目たり、猶巾の一身の首服たるが若き也、故に武辨と名く。苟變曾て二雞子を食ふ、衛公爲めよ、用ゐず、子思曰く、豈に二卵を以て干城の將を辨せんや云云。漢書の惠帝紀の註は武士力士也。

◎婦人

ねくがた。

曲禮より曰く、天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人、士曰婦人、庶人曰

妻、註に、妃の配也、后の言の後也、夫の言の扶也、孺の言の屬也、婦の言の服也、妻の言の齊也、全經に曰く、夫人との夫は從ふ也、專制無き也、孺とい柔弱にして以て順ふ也、婦とい人に服する也、妻とい之と徳を齊くする也、位愈々高きとき、則ち其名義愈々嚴なり、故に其名を親て以て其徳を知る可し。成語考に曰く、婦主中饋、烹飪治飲食之名、註は主饋也、饋食也、婦人専ら厨中飲食の事を主とるを謂ふ也。

◎夫婦

めうと。

成語考に曰く、孤陰則不生、獨陽則不長、故天地配以陰陽、男以女爲室、女以男爲家、故人生偶以夫婦、陰陽和而後雨澤降、夫婦和而後家道成。

◎婦人の三從

儀禮に曰く、婦人有三從之義、無專一之道、故未嫁從父、既嫁從夫、夫死從長子、故父者子之天也、夫者妻之天也。

◎婦に七去あり

小學明倫に曰く、婦有七去、不順父母、去、無子去、淫去、妬去、有惡疾

去、多言去、竊盜去、去の去る義也去婦出妻是なり。

◎夫妻反目

易の小畜の卦曰く、九三興説レ幅、夫妻反レ目、傳曰く、反目といひ目を怒らして相視るを謂ふ、其夫に順はずして反りて之を制する也、夫妻反目といひ、陰の陽を制せらるゝもの也、今反つて陽を制す、夫婦の目を反るが如き也、象に曰く、夫妻反レ目、不能正室也、傳に曰く、夫妻目を反む、蓋し其室家を正しくすること能ざるよ由る也。

◎不孝に三あり

孟子曰く、不孝有三無後爲大、養兒代親、積穀防饑、註に、趙氏曰く、禮は不孝の者三事あり、意阿り曲げ従ふを、親を不義に陥る一也、家貧しく親老いて、祿仕を爲さず二也、娶らずして子無く、先祖の祀を絶つ三也、三者の内後なきを大なりとす。

◎腹心之臣

腹心といひ心を同じくし、徳を同じくするの謂ひ也。六韜の龍韜、王翼篇に

曰く、太公曰、將有股肱羽翼七十二人、以應天道、武王曰、請問其目、太公曰、腹心一人、主下贊謀應卒、撥天消變、總覽計謀、保全民命、後漢書に、袁紹領冀州、以審配爲別駕、委腹心之任、并總幕府

◎風木之悲

風木の悲といひ去とて石は蒲團を着せられず「句意と同じ、親の存命の時に孝養を盡さざりしを後悔するを云ふ。韓詩外傳に、夫樹欲靜而風不止、子欲養而親不待、往而不可返者年也、逝而不可追者親也。

◎刎頸之交

刎頸の交りといひ生死を齊しくして頸を刎らるゝとも敢て悔ゆる事なき、總て信義を守る交際を云ふ。史記の廉頗藺相如列傳に曰く、今兩虎共闘、勢不俱生、吾所以爲此者、先國家之急、而後私讎也、頗聞之、肉袒負荆、至門謝罪曰、鄙賤之人、不知將軍寬之至此、卒相與驢爲刎頸之交、成語考に曰く、刎頸交相一如與廉頗、註に、言欲齊生死而刎頸無悔矣。

◎不羈之才

類書纂要曰く、不羈との、放達よして拘りらざる意、言ふこゝろの才識高過よして羈束す可からざる也。文撰よ向秀の思舊賦に、余與三嵎康呂安、居止接近、其人並有_二不羈之才_一。漢書の司馬遷傳に、少_二負_一不羈之才、註よ、不羈との、其材高遠にして、羈繫すべからざるを言ふ也。

◎不肖

身の人は如かざる事を不肖と云ふ、猶ほ不才の人と言ふが若し。中庸曰く、夫婦之不肖、可_二以能行_一焉。風俗通に、生_レ子不_レ似_二父母_一曰_二不肖_一。孝子よ、天下皆謂_二我道大似_一不肖、夫唯大、故似_二不肖_一。前漢書の武帝紀よ、所_レ任不肖、註に、師古曰く、肖の似也、不肖との象類する所あきを謂ふ、不才の人を謂ふ也。文撰に、不肖之才力、註よ、不肖謂_二不才_一也。

◎文莫

論語の述而篇に曰く、子曰、文莫_二吾猶_レ人也_一、何_レ晏の集解に、莫無也、文無者、凡言_二文皆不_レ勝_一於人。下學集よ云、文莫無智之義也。文莫を無智の

義とするの、古註の意なり。

◎負笈

ゆうがく。

遊學するを負笈と云ふ、負の背駄也笈の書籍也、故に笈を負て師に従ふと云ふ意也。漢書の蘇章傳よ、負_レ笈追_レ師、不_レ遠_二千里_一。成語考よ、負_レ笈千里、蘇章從_レ師之殷。續幽怪錄よ、吳_レ商學通_二千五_一經百_一史、四方學者、携_レ囊負_レ笈者、不_レ可_二勝_一計。

◎腹中之書

蒙求よ曰く、郝隆七月七日見_二鄰人皆曝_二曬衣物_一、隆則仰臥曝_二於庭_一曰、我曝_二腹中書_一。

◎布衣

へしめん。

布衣の白丁也、官位無きを謂ふ。即ち俗よ平人と云ふ意なり。出師の表よ、侍_レ中尙_レ書_一史參_レ軍、此悉貞_レ亮死節之臣也、願_レ陛下親_レ之信_レ之、漢室之隆、可_レ下計_レ日而待_レ也、臣本布衣躬耕_二於南陽_一。史記の蘇秦傳よ、蘇_レ秦說_二肅_一候_一曰、天下卿相人臣及布衣之士、皆高_二賢君之行義_一。田單傳よ、王_レ蠋布衣

也、義不_レ北_二面_一於_レ燕、況在_レ位_ニ食_レ祿者乎。成語考よ、布衣即白_丁之謂。

◎武庫 ものしり。

博學のものを稱して武庫と云ふ。晋書よ、杜預爲_二尚書_一、損_二益_一万機、不_レ可_二勝_一數、朝野稱美、號曰_二杜武庫_一、言其無_レ所_レ不_レ有。

人事身體

◎不義の富貴ハ浮雲の如し

論語よ、子曰、飯_二疏食_一、飲_レ水、曲_レ肱而枕_レ之、樂亦在_二其中_一矣、不義而富且貴、於_レ我如_二浮雲_一、註よ、聖人の心、渾然たる天_一、理困_一極に處ると雖も、而も樂み亦あらざることに無し、其不義の富貴を視ること浮雲の有ることなきが如し、漠然として其中に動く所なき也、程子曰く、疏食飲水を楽しむに非ざる也、疏食飲水と雖も能く其樂を改めざる也、不義の富貴、之を視ること輕くして浮雲の如く然り。

◎富貴されば他人も合ふ

史記の蘇秦傳に曰く、蘇秦喟然歎曰、此一人之身、富貴則親戚畏_二懼_一之、貧賤則輕_二易_一之、況衆人乎。文撰よ、曹遠の感舊の詩よ、富貴他人合、貧賤親戚離、註に、濟曰く、富貴なるものハ不肖と雖も人皆之に附く、請ひ求むる所あるを以ての故に他人と雖も亦合ふ也、貧賤なるものハ賢人と雖も皆之を耻づ、窺望する所なきを以ての故に親と雖も乃ち離る_レ也。鷓冠子よ、家富疎_一族聚、居貧兄_一弟離。

◎巫山之夢

文撰よ宋玉の高唐賦よ、昔し先_一王嘗て高唐よ遊び怠て晝寢す、夢に一婦人を見る、曰く妾ハ巫山の女也、高唐の客と爲る、聞く君高唐よ遊ぶと、願くハ枕席を薦めん、王因りて之に幸す、去るときに辭して曰く、妾ハ巫山の陽、高丘の岨に在り、旦に朝雲と爲り、暮に行雨と爲る、朝朝暮暮、陽臺の下よす、旦朝之を視れば言の如し、故に爲_二廟_一を立て號して朝雲と曰ふ。「願くハ枕席を薦むとの、註よ、善曰く薦ハ進也、親しく枕席を進め親昵を求めんと欲するの意也。

● 蜉蝣の一期

蜉蝣の一期との世のはかき事と喩へていふ也。蜉蝣の命短かき蟲なり、一期との其一生涯なり、故に人生の短きと比す。爾雅に曰く、蜉蝣渠畧也、郭璞の註に云、似蜻蛉、身狭而長、有角、叢生糞土中、朝生夕死、陸遂の疏に云、通謂之渠畧、似田蟲、有角大如指、長三四寸、甲下有翅能飛、夏月陰雨地中出。白樂天の詩に、長生無得者、舉世如蜉蝣。成語考に、人生死し易きを蜉蝣在世と曰ふ。

● 淵に臨んで魚を羨む

此言の世の人妄りに求めて心身を費すも終に一毫の得る所なき者、此類あり、末を論ずるより本を勤むるゝ如すと云ふこと也、孔子も吾終日終夜不寐以思無益不如學、と云へり、又孟子も、本を捨て末を論せば小水も岑よりも高からんと云へり、本立て道生と云ふ意なり、故に魚を得んと欲せば、網を結ばざれば能はずと也。抱朴子の最學篇に、夫不學而求知、猶願魚而無網焉、心雖勤而無獲矣。

● 富貴驕を生じ

寶鑑に曰く、富貴生驕奢、驕奢生淫亂、淫亂生貧賤、貧賤生勤儉、勤儉生富貴。紀平洲曰く、道を知る者の驕奢を爲さず、富貴を羨まず、飲食を薄ふし、衣服を惡ふし、唯耻を知る身を慎しむを務むなり。

● 母望之福

望まらずして至るを母望の福と云ふ。史記の春申君傳に、朱英謂春申君曰、世有母望之福、(中略)春申君曰、何謂母望之福、曰、君相楚二十餘年矣、雖名相國、實楚王也、今楚王病且暮、旦暮而君相少主、因而代立當國、如伊尹、周公、王長、反政、否即遂南面稱孤而有楚國、此所謂母望之福也。

● 無骨

文撰の西征賦に、入屈節於廉公、若四體之無骨。無骨の字の爰に出たり。細流抄に、無骨なり、俗に思ひやりなきを無骨なるといひ習ひし侍り」とあり。

● 風聽

國語の晉語に、風_ニ聽臚_言於市_ニ註に、風の采也。臚言の上より語を傳へて下よ告るを云ふ。

◎風聞

風聞との取り聞くと云ふ意なり。文撰に、沈休文秦_ニ彈_{王源}云風聞註に、善曰く、漢書尉佗曰、風聞老_カ夫父母墓已壞削。國語の註よ、風の采也采_ニ聽商族之言_{一也}。

◎無雙

ならびなき也。東方朔の答客難云、海内無雙。此の外天下無雙、國士無雙、殿中無雙、古今無雙、等の語多し。

◎諷誦

周禮春官よ、大司_一樂諷誦_ニ註に、背_{スル}文曰_レ諷以_レ聲節_之曰_レ誦。

◎不性

不性の字の佛語より出づ、佛家にて作用是性と定めたるが故よ、手足を動すに、懶_{もの}ものを不性者と云ふ。

◎不腆

謙辭なり。左傳の文十二年に、不腆_{ナル}敝器_{、不}足_レ辭_也註よ、腆厚也。類書纂要よ曰く、禮の厚からざるを不腆と云ふ。

◎粉骨

文體明辨よ云、唐_草卓_與三將士_ニ盟文曰、粉_ニ骨_糜軀_{決無}所_レ顧。今切勞あるを粉骨を盡す杯と往々書けり、單に粉骨といふて然るべし。

◎輻輳

韻會に、輻輳の競ひ聚る也。史記の張儀傳に、四通輻輳。漢書の賈誼傳に輻輳並進、とあり。

◎步難

人の行歩に堪_ハざるをふかんと云ふの此字也、あゆみなやむと讀む可し。

◎負荊

謝罪するを負荊と云ふ。史記の廉頗藺相如列傳に、頗聞_レ之肉袒負_レ荊

至門謝罪云云、此れより出づ。

◎風采 ふうさい よふす。

漢書の黃霸傳に曰く、霸才長於治民、及下爲丞相、總綱紀號、令風采不及丙魏干定國。後漢書に、名動京師、士大夫想望其風采。類書纂要に曰く、風采の威風光采あり。

◎物故 ぶつこ しぬる。

史記の匈奴列傳に曰く、漢大將軍大圍三千單、所殺虜八九萬、而漢士卒物故亦數萬、註は物故の死を謂ふ也、其鬼物に同じき故を云ふなり。

◎不祿 ふろく 全

大夫の死するを不祿と云ふ。曲禮の註に、士祿の以て耕を代ふ、不祿の其祿を終ず。

◎訃音 ふおん しんだしらせ。

類書纂要に曰く、父母死すれば、則ち其狀を以て親友隣人よ聞するを、訃音と云ふ。又曰く、親友隣人訃を聞き喪家よ往きて之を問を吊慰と云ふ。

宮室官殿

◎普請 ふしん

普請の字ハ、三國志の呂蒙傳よ出づ、家を造るを普請と云ふハ、佛語なり、是れ普く諸人を招き請け、其多力を得て、事を爲す義あり。敕修清規に、普請法、蓋上上均力也、分付堂司行者、報衆掛普請牌、仍用小片紙書貼牌上曰、某時某所。

◎楓震 ふうしん

天子の常殿を楓震と云ふ。漢帝の宮殿に多く楓樹を植ゆ、故を以て遂に楓震と稱するよ至れり。成語考に曰く、楓震乃天子所落、註は帝居を震と曰ふ。

◎斧藻 ふそう

韻會に云、斧ハ斧斷削也、藻ハ文飾也。楊子法言に曰く、吾未見好斧ニ操其德、若斧ニ操其藻者、歟、註に、李軌曰く、斧藻ハ猶は楯を刻み楹を丹

にするの飾の如し。

文學技藝

◎文點を加へて

成語考よ曰く、文章全美 曰ニ文不加點、註に李白翰林に在り、詔りして白蓮花の序及び官詞を草せしむ、方に大に醉へり、中貴人水を以て之に沃ぐ、稍く醒て筆を索て一び揮ふ、文點を加へず。

◎文章の絶唱

鶴林玉露よ、太史公伯夷傳、蘇東坡赤壁賦、文章絶唱也。

◎不龜手の藥

微かなるものたりとも能く之を用ねれば遂に大功を奏すと云ふ諺なり。

莊子の逍遙遊篇に曰く、莊子曰、宋人有善爲不龜手之藥者、世世以泝泝、泝泝爲事、客聞之請買其方百金、聚族謀曰、我世世爲泝泝、泝泝不過數金、今一朝而鬻技百金、請與之、客得之以說吳王、越有難、吳王

使ニ之將ニ冬與ニ越人ニ水戰、大敗ニ越人ニ裂レ地而封レ之、能ニ不龜手ニ也、不龜手との寒中手を水に入るゝも「アカギレ」のせぬ事なり、泝泝統との綿にて織りたる切を洗濯する職業あり。

◎復命 報命

使者となり還りて其用務の事を報ずるを復命又の報命と云ふ。論語に、賓退必復命曰、賓不顧矣。卓氏藻林よ曰く、使臣復命 曰ニ報命。

◎服膺

能く心に秘めて守るを云ふ。中庸よ、子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺不レ失之矣、註よ、回の孔子の弟子顔淵の名、拳拳の奉持の貌、服の猶は著の若き也、膺の膺也、奉持して之を心膺の間著く、言ふことゝるの能く守る也。

◎浮屠 浮屠氏

浮屠との佛を云ふ、浮屠氏との僧を云ふ。梵語に、佛陀、或云浮屠部、多母陀沒陀皆是五大梵語、楚夏并譯爲覺、合而稱佛。韓文よ、吾聞浮屠

人善^{ハクシ}幻多^{チシト}ニ技能^ニ。後漢の襄階傳に、宮中立^{ニツ}黃^ニ老浮圖^ノ之祠^{ナリ}。

器財雜具

封袋

物を封し包みたる袋を封袋と云ふ。諺草^ニ云、中^ニよさせる事なくて、無用の所^ニよ結構するを俗^ニよ封袋と云へり。

粉本

畫手本を粉本と云ふ。事類全書の畫論に云、古人の畫藁^ニ之を粉本と云ふ、前輩多く之を寶蓄す、蓋し其草草意を経ざる所、自然の妙あり。

風俗通

後漢の儒家應劭が撰ぶ所あり、十卷、卷毎に各總題ありて、題毎に散目あり。

草木花實

- 富貴花 天香 國色

共に牡丹の異名あり。成語考に、國色^ニ天^ニ香^ニ乃^チ牡丹^ノ富貴^{ナリ}。茂叔の愛蓮説に、牡丹の花の富貴なるもの也。書言故事^ニよ、牡丹を天^ニ香^ニ國^ニ色^ニと云ふ、王建の詩に、國^ニ色^ニ朝^ニ酣^ニ酒^ニ、天^ニ香^ニ夜^ニ染^ニ衣^ニ。劉禹錫の詩に、惟有^ニ牡丹^ノ真^ニ國色^ニ、花開時^ニ節^ニ動^ニ京^ニ城^ニ。

通用雜錄

無聊

類書纂要^ニ曰く、無聊^ノの窘^ニめられて奈何^{トモ}とするなき也。文撰^ニよ、李陵の答^ニ蘇武^ニ書^ニ曰く、與^ニ子^ニ別^ニ後^ニ、益^ニ復^ニ無^ニ聊^ニ。

風俗

漢書の地理志に曰く、人有^ニ剛^ニ柔^ニ緩^ニ急^ニ、音聲^ニ不^ニ同^ニ、擊^ニ水^ニ土^ニ之^ニ風氣^ニ、故^ニ謂^ニ之^ニ風^ニ、好^ニ惡^ニ取^ニ捨^ニ、靜^ニ動^ニ嗜^ニ欲^ニ、故^ニ謂^ニ之^ニ俗^ニ。孝經^ニ曰く、移^ニ風^ニ易^ニ俗^ニ、莫^ニ善^ニ於^ニ樂^ニ、註^ニに、風^ニと^ニ化^ニの行^ニる所^ニ、俗^ニと^ニ習^ニの成^ニる所^ニ、言^ニふこ^ニろ^ニの弊^ニ風^ニ頹^ニ俗^ニを移^ニし易^ニて、民^ニをして正^ニに趨^ニき厚^ニに歸^ニせしめんと欲^ニするの、樂^ニを脩^ニして以^ニて之^ニ

を化するより善さの莫き也。韻會に、上行へば下效ふ、之を風と云ふ。説文に、俗の習也。增韻よ上よ化する所を風と爲し、下に習ふ所を俗と爲す。

◎風流

風流よ二義あり其一ハ、後漢書の高士傳の註よ、世を遁れ時を伺ひて、清潔の風、各條流あるを云ふとあり。又或る輕俊の少年を指す事もあり、萬葉集に、風流士をたわれを」とよあり、下學集に、風流ハ風情の義なり、日本の俗、柏子物を呼んで、風流と云ふ」とあり。山谷詩の註に、風流の字、或ハ美に或ハ惡なり、用ふる所の意、如何に隨ふのみ。

◎觸

諺草に云、俗に人々よ行て、事を告ぐるを觸と云ふ、觸ハ狀觸事と云ふ是也、然れ共觸ハ突犯すの義にして、行示の意義あり、然れば行示の事を觸といふべからず、徇といふべし、徇の字史記に出たり。漢書の高祖紀の註に、師古曰、徇行示也、司馬法曰、斬以徇、言使人將行偏示衆士以爲戒。

ことば之部

天地時令

◎虎狼之國

天下を併吞する心ある國を云ふ。史記の屈原傳に曰く、懷王欲行、屈平曰、秦虎狼之國、不可信、不如無行。

◎故郷を桑梓と曰ふ

詩經小雅の小辨篇に、維桑與梓、必恭必敬、止靡瞻匪父、靡依匪母、註よ桑梓ハ二本、古ハ五畝の宅、之を墻下に樹て、以て子孫よ遺し、蠶食よ給し器用に具ふるもの也、言ふところハ桑梓ハ父母の植る所、尙ほ且つ必ず恭敬を加ふ、況んや父母至尊至親宜しく瞻依せざるあかるべき也。成語考に曰く、故郷曰梓里。續韻府よ云、稱郷里曰梓里。卓氏藻林に云、桑梓ハ故里の稱。

●穀旦 穀日

書經の洪範に曰く、既富方穀。詩經の東門之枌篇に、穀旦于差、南方原、註は、善日を差擇んで、以て南方の原に會す。故事成語考に、穀日吉日、悉是良辰、註に、穀善也旦令旦也。

人倫人品

●國家之柱石

猶は總理大臣と云ふが如し。漢書の元后傳に曰く、前丞相樂昌侯、商、本以先帝外屬、內行篤有威重、位歷將相、國家柱石臣也、其人守正不肯誦節也。柱といふ梁下の柱、石といふ柱を承くるの礎也、大臣國の重任を負ふこと屋の柱、及び其石の如しと云ふ義あり。

●閫外之臣

將帥を閫外の臣と云ふ。史記の馮唐傳に曰く、臣聞、上古王者之遣將也、跪而推轂曰、閫以內者、寡人制之、閫以外者、將軍制之云云、註に、閫の門

限あり。

●皞々之民

慈仁の下に在る民を云ふ。孟子に、王者民、皞皞如也。

●股肱之臣

書經の益稷に曰く、帝曰、臣作股肱耳目、註に、君の元首也、君臣に資りて以て助をなす、猶は元首の股肱耳目を須て以て用を爲すが如き也。又曰く、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉、註に、元首の君也、股肱の臣也。成語考に、臣鄰輔翼故曰股肱。左傳の昭九年に、君之卿佐、是謂股肱。

●骨鯁之臣

骨鯁の臣といふ剛毅の臣を云ふ。史記の陳丞相の世家に曰く、彼項王骨鯁之臣、亞父鍾離昧龍沮周殷之屬、不過數人耳。事文類纂に曰く、幹愈操守堅正、梗言忌む所無し、監察御史に遷る、上疏して宮市を極論す、德宗怒て山陽の令に貶す。類書纂要に曰く、鯁ハ魚骨也。

●骨肉之親

呂氏春秋に曰く、父母之於子也、子之於父母也、此是謂骨肉之親。父子兄弟の親み、肉と相離れざるが如きを云ふ。

◎湖海之士

豪懷卓落の士を云ふ。史記の魏志陳登傳に曰く、登字元龍、許汜與劉備論天下之人、汜曰、陳元龍湖海之士、豪氣未除、故事成語考に、負豪氣者、曰湖海之士。

◎國士

國士といふ一國の男子と云ふ意也。史記よ、趙襄氏滅智伯、其臣豫讓欲爲報讎、襄子數豫讓曰、子不嘗事范中行氏乎、智伯盡滅之、而子不爲報讎、而反委質、臣於智伯、智伯亦死矣、子獨何以爲之報讎之深也、豫讓曰、臣事范中行氏、以衆人遇我、我故衆人以報之、至於智伯、國士以遇我、我故國士以報。

◎子の父の爲めは隠す

論語に、子爲父隱、直在其中矣、註に、父子相隱すの天理人情の至りなり、故は直を爲すことを求めざれども而も直きこと其中に在り、謝氏曰く、理は順ふを直とす、父子の爲めに隠さず、子父の爲めに隠さざれば、理に於て順あらん邪。

◎子と擇ぶは父は如く、莫し

左傳の昭十一年よ、擇子莫如父、擇臣莫若君。父の我子の動止進退を日に目撃する所なれば、其子の適業を擇ぶの偶々見る他人の及ぶ所よ非ざるを云ふ。

◎孔門の十哲

論語に、德行顏淵閔子騫冉伯牛仲弓、言語宰我子貢、政事冉有季路、文學子游子夏、註よ、程子曰く、門人の賢者固より此に止まらず、曾子道を傳へて而して與からず、故は知る十哲の世俗の論なる事を。爾雅に、哲智也、疏よ、哲大智也。

◎孔子の弟子

故事成語考よ曰く、孔子居杏壇、賢人七十、弟子三千。杏壇に、臧文仲誓盟

之壇、孔子常居其處、以教授生徒。

◎國器

漢書の韓安國の傳に曰く、唯天子以爲國器、註に國器といふ其器用重、大よし
て國政に施す可きを言ふ也。史記の晋の世家よ、楚成王曰、晋公子賢、而
困於外、久、從者皆國器。成語考よ、國器是稱人之子、註よ、國器有、其才、
可爲國家之用。

◎國賊

韓詩外傳に、不恤乎公道之達義、倫合苟同、以持祿養者、是謂國賊也。
尉繚子に、將自千人以上、有戰而北、守而降、離地逃衆、命曰國賊、身
戮家殘、去其籍、發其墳墓、暴其骨於市、男女公於官、解、男女公於
官、といふ男の奴と爲し女の婢と爲す、則ち功臣は賜りて奴と爲すを云ふ。

◎子を知るよ、友を視よ

史記に、傳よ曰く、不知其君、視其所使、不知其子、視其友、正解よ、物
の類を以て聚る物なり、賢不肖正不正似たるもの君臣とあり友とす、故

に、用ゐて使へる、臣を視て其君の善惡意趣を察し其友よ於るも亦然り。
又曰く、不知其人、視其友。西哲路克曰く、朋友に親交するの好惡を均
ふるに在り。又爾塞爾曰く、朋友の良否の利害の分るゝ所なり。今川貞
世曰く、己れに勝る友を好んで、我に劣る朋を好まざるの善人の賢心なり。

◎子ゆへに闇に迷ふ

大學よ曰く、諺有之、人莫知其子之惡。是れ諺の意よ同じ、後撰兼輔朝
臣の歌に「人の親の心へ闇よあらねども子をわもふみちよまよひぬるかな」
とあり。

◎氷ハ水より出て水より寒シ

氷の水より出れども水よりも優れて寒し、是れ學問に油斷なく勤むれば、弟
子も師匠に優るとの喩なり。荀子の勸學篇に、學不可已、青取之於
藍、而青於藍、冰水爲之、而寒於水。

◎後生畏る可し

邦俗の諺よ、「若木の下で笠を脱げ」と云ふことあり、若木の若年の人、後に

の如何ある學者になるも量り知るべからず、笠を脱げとの敬禮せよとの意あり、即ち是れ後世畏る可しの意と同じ。論語に、子曰、後世可畏焉、知來者之不知、如今焉、四五十無聞焉、斯亦不足畏也。已。

◎琥珀塵を吸へど穢を吸はざ
廉潔なる人の、不正の物を受けず、不義の事への従ひぬと云ふ諺あり。吳志に、虞翻曰く、虎魄不取腐芥、磁石不受曲鍼、虎珀の芥を吸ふ性あれども腐りたる塵の吸はず、磁石の鍼に随ふて南北を示せども、曲りたる鍼の受け従がらざるを云ふ。

人事身體

◎國是を定む

國家の公論を定むるを云ふ。劉向新序曰く、楚莊王問孫叔敖曰、寡人未得所以爲國是也、孫叔敖曰、國之有是、衆生之所惡也、臣恐王之不能定也。

◎國光

易の觀の卦よ、六四觀國之光、利用賓于王、註よ、國の威光輝を觀見する也、君の身を指すして國と云ふ者の、人君は在て言ふ、豈止た其一身を行ふ事を觀のみならんや、當に天下の政化を視る時の則ち人君の道德見る可し。

◎公侯伯子男

事物起原曰く、公侯伯子男之を爵と謂ふ、唐虞五端を輯め、五玉を修む、是れ五等の堯舜より始まる、禮の舍文嘉に曰く、殷の爵の三等、周の五等、黃帝の五等を立つ也。孝經よ、昔者明王之以孝治天下也、不敢遺小國之臣、而況於公侯伯子男乎、孔安國の註に、公侯伯子男、凡そ五等、皆國君の尊爵也。

◎功遂げ身退く

老子經に曰く、功成名遂身退天之道也。正解よ仕官のものの功を奏すれば身を退き閑散の地に着くは天道あり、左れば人の辱しめを受けずと云ふ意

なり。

◎恒産無き者ハ恒心無し

孟子に曰く、無_レ恒産_ニ而有_レ恒心_一者、惟士爲_レ能_ル。若_レ民則無_レ恒産_ニ、因無_レ恒心_一。苟無_レ恒心_ニ、放辟邪侈無_レ不_レ爲_レ已_ニ。註に、恒ハ常也、産ハ生業也、恒産ハ常_ニ生るべき_一の業也、恒心ハ人常_ニ有る所_一の善心也、士嘗て學問して義理を知_ル、故_ニ常_ニ産無し_ト雖も而も常心あり、民ハ則ち然ること能はず。

◎故郷には錦を飾る

史記の項羽本紀よ、項羽曰、富貴不_レ歸_ニ故郷_ニ、如_ニ衣_レ繡夜行_ニ誰知_レ之者_一。漢書に、繡作_レ錦、師古曰く、人の之を見ること無ければ、榮顯ならず。後漢書の景丹傳にも亦此語あり。南史劉_一之選の傳よ、令_ニ卿衣_レ錦還_ニ郷_ニ。又唐の魏_一元_一忠の傳に、錦を衣て晝遊の語あり。又後撰の歌に「紅葉葉をわけつゝ行の錦着て家に歸ると人や見ぬらん」とあり。

◎故郷忘じ難し

檀弓よ曰く、君子樂樂_ニ其所_ニ生_ニ禮不_レ忘_レ其本_ニ古_一之_一人有_レ言_ハ狐死正_ニ丘首_ニ

仁也、是れ諺の意とおなじ。

◎口中の雌黄

議論の反覆するを口中の雌黄と云ふ。書言故事よ曰く、晋王衍善_ニ玄言_ニ義理有_レ所_ニ未_レ安_ニ、隨_ニ即更改_ニ、世號_ニ口中雌黄_ニ、註に、雌黄ハ古_一人字を寫して誤あれ、雌黄を以て塗りて之を改正す、王衍口中に就て改變す、紙上の改めを待ざる也。

◎辭多ければ品少し

詞多く急に軽々しくものいふ者の品節少しと云ふ意なり。源氏河海抄よ、辭_一多_ニ品少_ニ、註よ、品との威儀の品節也。易の大傳よ云、吉人之辭寡、躁人之辭多。

◎聲かゝて人を呼

徳ある人の言説を假らずして人自ら歸服する喻也。史記の季_一廣傳に、桃李不_レ言_ニ、下自成_レ蹊_一（たの部人倫人品門を見よ）

◎虎穴よ入らざれば虎子を得ず

危険を犯さざれば大利の得られぬと云ふ諭也。後漢書の班超傳に云、班超曰、不入虎穴、不得虎子。成語考に、除兇不畏兇、兇曰、不入虎穴、焉得虎子。吳志に、呂蒙欲從軍、母止之、蒙曰、不入虎穴、焉得虎子。世話に、身を捨て能く浮む瀬もあると云ふも同じ意なり。

◎志ざし有る者ハ事竟り成る

後漢書に、將軍前在二南陽、建此大策、常以爲落落難合、有志者事竟成也。斯邁爾斯曰、凡そ志す所の物を成さんと欲せば、必ず成就すべしと自ら信じて疑ふ勿れ、之れ第一の助けなり。貝原益軒曰、志を立るの大よして高さを欲す、小よして低さを欲せず、小よして低ければ小成に安じ、大よして高ければ、則ち大成を期す、凡そ事の上を學んで、中に至り、中を學んで下に至る者なり、故に天下一等の人たるを志ざす可し。

◎志し千里に在り

世説に、王敦每醉後、以鐵如意敲唾壺、歌曰、老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年壯心不已、歌闋壺半缺矣。書言故事に曰、意遠曰志、志在千里、羅

捨曰、狹少ある精神の瑣事の爲め捕へらる。

◎心の鬼が身を責る

心の迷ひを云ふ。諺草に佛の演説あり、地獄も、天宮も、鬼畜も、修羅も、皆是一心の所爲也。佛説正法念經に云、閻羅獄卒非實有情、以衆生妄業刀故見之。

◎五十九年の非

邦俗の諺に、後悔ささよたす」と云ふ意なり。莊子の寓言篇に曰、孔年行年六年而六十化、始時所是、卒而非之、未知今所謂是之非、五十九非也。古今集に、「ささ足らぬ悔のやちたひかあしきの流るゝ水の歸り來ぬなり是れ後悔先に立ぬ」諺の歌意なれと義同じ。

◎胡馬北風よいばふ

文撰二十九の古詩に云、胡馬依北風、越鳥巢南枝。胡馬の北狄の馬なれば北風をしたひ、越鳥の南國の禽なれば南枝に巢ふ、皆其本を忘れざる諭なり。

◎孤雛腐鼠

成語考よ曰く、人を棄ると甚だ易きを孤雛腐鼠と云ふ。史記よ、漢、肅宗謂テ
竇憲曰、奪ニ主田園、何無レ異ニ趙高指レ鹿爲レ馬、朕欲レ棄レ汝如ニ孤雛腐鼠ニ耳。

◎五十步百步

大同小異なるを五十步百步と云ふ。孟子の梁、惠王篇に、孟子對曰、王好
レ戰、請以レ戰喻、填然鼓之、兵刃既接、棄レ甲曳レ兵而走、或百步而止、或五十
步而後止、以ニ五十步ニ笑ニ百步ニ則如何、曰不可、直不ニ百步ニ耳、是亦走也、曰、
王如知レ此則無レ望ニ民之多ニ於鄰國ニ也、註よ、填、鼓の音也、兵、鼓を以て進
み、金を以て退く、直、猶但の如き也、此を言て以て鄰國其民を郵ます、惠
王能く小惠を行ふ、然れども皆王道を行ふて以て其民を養ふこと能はず、此
を以て笑ふべからざるよ喻へり。

◎心よ銘じ骨よ鏤む

成語考に曰く、銘、心鏤、骨、感レ德難レ忘。字彙よ、銘、記也、鏤、彫刻也、是
れ徳を感ずるの深き、骨よ刻み鏤め、永く記して忘れずと云ふ義なり。

◎虎口を免かる

危き所を免かるよを云ふ、又危き場よ望むを虎口に望むと云ふ、又兵士の軍
壘を指して虎口と云ふ。莊子の盜跖篇よ、孔子曰、疾走科ニ虎頭、編ニ虎鬚、
幾不レ免ニ虎口ニ。

◎胡蝶之夢

莊子の齊物論に曰く、莊周夢爲ニ胡蝶、栩栩然胡蝶也、自曉適レ志與、不知
レ周也、俄、然覺則遽々然周也、不知周之夢爲ニ胡蝶、與、胡蝶之夢爲ニ周與。
堀川百首よ「百とせの花よやとりて過してさこの世の蝶の夢とそありける」

◎事託 言傳

事物を以て人に託して遣るを事託といひ。言を傳へて我が思ひを人よ言
ひ遣るを言傳と云ふ。事託言傳相混して一にすべからず。文撰の高唐
賦に、傳レ言羽獵。魏の文帝與ニ鍾太理ニ書よ、傳レ言未レ審。是れ皆言傳の
意也。

◎五里霧中

後漢書に、張楷術を好み能く五里霧を作す、斐優能く三里の霧を爲す、自ら張楷に如す、從て學ぶ、楷肯て優を見ず、後ち霧を作し賊を作す、事覺れて捕へらる云云。五里霧中よ迷ふ」と云ふ言茲も出づ。

◎鼓盆之憂

自分の妻を喪ふを鼓盆の憂と云ふ。莊子の至樂篇よ、莊子妻死、惠子吊之、莊子箕踞、鼓盆而歌。

◎餽口

くらます。

左傳隱十一年よ、寡人有弟、不能和協、而使餽其口於四方、註に、餽ハ寄也、餽口といハ粥を食ふを云ふ也。説文に、餽ハ寄食也。成考語に、稱ニ教館日糊口。書言故事に曰く、以文爲活日餽口於書。

◎御前

蔡邕獨斷に云、天子所_レ在、曰_ニ御前_一。諺草よ、今俗に、我より位高き人よ對して、なへて御前杯といふハ僭上の詞にて、尤も誤りあるべし、中華にてハ天子の服を御服と云ひ、書を御書と云ふ、皆四海を統御する義を取りて天子

ならねば、御の字を用ゐず」とあり、内閣員等が御前會議杯と云ふハ強ち御前にての會議よあらざるべし。

◎居士

輟畊錄に云、今人居士を以て號とする者甚だ多し、六經の中よ考ふるに、禮記の玉藻に、居士錦帶と云ふあり、註に、云く道藝の處士也と、政齊漫錄よ曰く、居士の號商周の時に起れり、韓非子を按するよ、曰く太公を齊よ封す、東海の上に居士任_レ商華_一仕と云ふ者兄弟二人議を立て、曰く、吾れ天子よ臣たらず、諸侯に友たらず、耕して食ひ掘りて飲む、仕へずして力を事とすと、然らば居士と云ふハ、處士の類よして隱者の號也。因に曰ふ、處士といハ仕へずして家よ居る者を云ふ。楞嚴經よ、愛談_ニ名言_一、清淨自居_ニ居士_一。

◎吾子

吾子の俗に「おまら」と云ふ義にて、相親しむ辞なり。孟子よ、或問_ニ乎曾西_一曰、與_ニ吾子_一與_ニ子路_一孰賢。儀禮の冠禮よ、願_ニ吾子_一之教_レ之也。

◎牛角

物の相並んで優劣なき事を牛角と云ふ。法華經譬喩品、首如牛頭、科註、我見、依りて邊見を起す牛頭の兩角の如きのみ。蓋し牛角と云ふ事、是より出づ。

◎口實

人の話柄と爲すを口實と云ふ。左傳の註に、口實、但た其言有る而已。書の仲虺之誥に曰く、成陽放桀于南巢、惟有慙德曰、予恐來世以台爲口實、註、陳氏曰く、堯舜の天下を以て讓る、後世名を好むの士、猶ほ知らずして之を慕ふものあり、湯武の征伐して而して天下を得、後世利を嗜むの人安んぞ以て口實と爲さざるを得んや、此れ湯の恐る、所以ある歟。

◎滑稽

史記の樽里子傳、滑稽、多智、索隱云、滑、亂也、稽、同也、辨捷の人の非を言ふて是の如くし、是をいふて非の如く能く同異を亂る、謂ひ也。又崔浩の滑稽の酒器也と註せり、言口より出で、章を成す、詞窮まり竭すること滑稽の酒を吐くが若し、と云へり、左れども同異を亂るの註然らん。

◎混雜

物の混亂してまじはる事を云ふ。字彙に、混、水の雜る貌。又ことばと云ふも此字なり。

◎困

俗は病杯のつゝるを困ると云ふ。枕草子、ものよけにこうするやとあり、困の字也、くるしむ心を云ふ。

◎巨細

張茂先の鶴鷄賦、巨細舛錯。朱子大學の序云、詳略相因、巨細畢、學云云。

◎姑息

唐の兵志曰く、天子力不能制、因而撫之、謂之姑息之政、姑息愈甚、而兵將愈驕。禮記の檀弓に、魯子曰、君子之愛人也、以德、細人之愛人也、以姑息、註に、姑、且也、息、休也。

◎胡盧

わらふ。

口を掩ふて笑ふを胡盧と云ふ。説苑よ、客見俛而掩口、胡盧而笑曰燕石也。成語考に曰く、人微笑曰ニ莞爾、掩口笑曰ニ胡盧。

●**哄堂** おほせいのわらひ。

衆人の笑ひを哄堂と云ふ。書言故事に曰く、滿坐笑曰ニ哄堂、御史分記に曰く、御史有三院、一曰ニ臺院侍御史、呼ニ端公御史、又次者一人知ニ難事、謂ニ之雜端、二曰ニ殿院殿中侍御史、三曰ニ察院監察御史、每ニ公堂會食、雜端在ニ南楊、主簿在ニ北楊、絶ニ笑言、若有不可忍者、雜端大笑、而三院皆笑、謂ニ之哄堂、則不罰。

●**故實** わけ。

國語より出づ、國語の註よ、韋昭曰く、故實ハ故事の是者也。

●**狐疑** まよひ。

漢書の文帝紀の註よ、師古曰く、狐之爲獸、其性多疑、每渡氷河、且聽且渡、故言ニ疑者、而稱ニ狐疑。成語考よ、心迷似ニ狐疑、註に、狐邪媚之獸、狀如猫、黃赤色、小前大後、死則首邱不忘本也、性多疑、每渡河、必待ニ水無。

聲、方渡。楚辭よ、猶豫狐疑兮。諺草よ、今下郎の詞に、物の價を疑事を、こざると云ふ、狐疑の字なり。

●**劫と歴**

韻會よ曰く、説文よ、劫人欲去、以力脅止曰劫。梵書よ、以一世爲一劫。諺草に、俗よ劫を歴と云ふの世を歴也、又碁の詞に、劫をつひと云ふ事あり、人のいたむべき事をいひのしる杯を劫と取ると云ふも、碁の手より云へり。源氏未摘草に、重き劫よ、御心の中よおほしいづ」とあり。

●**無越**

無越との限りも無しと云ふ義也。野樵よ云、八雲抄に、事外なり」とあり。河海よ、無越とも、閑雅とも書けり。

●**苟且 偷安**

漢書の宣帝紀に、樞機周密、品式備具、上下相安、莫有苟且之意也。賈誼新書よ曰く、夫れ火を抱ひて之を積たる薪の下に措て其上に寐ぬ、火未だ燃るよ及はず、因て之を安しと云ふの、偷安する也。韻會よ、苟且ハ草率なり。

偷安の後日を慮らざるを云ふ。

◎魂魄 たましひ。

左傳の昭七年よ、子産曰、人生始化、曰魂魄、既生魄、陽曰魂、註に、魄の形也、陽の神氣也。又昭二十五年よ、心之精爽是謂魂魄、簡よ曰く、精の血也、爽の明也、心の神、明陽は屬して魂と爲り、心の精、血陰は屬して魄と爲る。白虎通に、魂とい何の謂ぞ、魂の猶は伝伝の如き也、行て體せざる也、動きての則ち情を主る、魄とい白也、猶は人よ着く者也、性を主る。

宮室官殿

◎紅樓 緑窓

成語考よ、緑窓は是れ貧女の室、紅樓は是れ富女の居。

◎建立

國語の晋語に出づ、諺草よ、俗よ宮寺など營作するを建立と云ふ。又漢書の郊祀志よ、建立立社稷。

文學技藝

◎今日學ばざして來日ありと謂ふ勿れ

朱子の勸學文よ曰く、勿レ謂今日不レ學有ニ來日、勿レ謂今年不レ學有ニ來年、月日逝矣、不ニ我延一嗚呼老矣、是誰之愆、光陰矢の如し老いて必ず後悔すべし、是れ誰の愆ぞや、少壯の時怠りたるが故なり。西哲斯邁爾斯曰く、光陰の人をして才徳を涵養し、品行を方正ならしむ、毎日僅よ一時の間と雖も之を無益よ徒消せずして、進修の事に充てなば、數年の後に及び愚昧ある人も化して聰明の人となるべし、亦之を慈悲善根の事よ充てなば生涯多くの果實を生ず、其死期の收獲の秋となるべし、加之毎日只だ十五分の光陰を一心よ學習の事に用ゐるべ、一步の暮に及んで必ず自ら其進境あるを覺ふることあるべし。

◎國語を廢する勿れ

清の太宗臣子を諭して曰く、國家天に承け業を創す、未だ其國語を棄て而し

て他國の語を習ふ者あらず、國語を棄て而して他國に效へば、其國未だ長久なるものあらざる也、蒙古の諸臣、子蒙古の語を棄て名號俱に喇嘛を學び、率に國運の衰微を致す、爾ら臣民、其れ慎んで我滿語を廢する、勿れ。

◎口耳之學

小人の學問を云ふ、途よ聞て途に説くが如き、俗に所謂請賣學問を口耳の學と云ふ。楊子方言よ、小人之學也、入乎耳、出乎口、口耳之間四寸耳、曷足、以美、七尺之軀、一哉。

◎胡椒丸吞

朱子の曰く、大凡讀レ書、須ニ是熟、讀ニ熟、讀了、自精、熟、精、熟、後、理、自見、得、如、喫、果、子、一、般、臂、頭、方、咬、一、開、不、見、滋、味、一、便、喫、了、須、是、細、嚼、教、爛、則、滋、味、自、出、方、始、識、得、這、箇、是、甜、是、苦、是、辛、始、爲、知、味。是れ果を喫する事を、喩として、書を讀むに意義を咀嚼して始めて味を知るべしと云ふ意なり、誠よ世話に云ふ胡椒丸吞といふ事故有る也。藤田一正曰く、咀嚼の二字、書を讀むの要訣、書を讀て咀嚼玩味する能わす、忽々看過せば、日日よ十百卷

を誦すと雖も大抵耳食の徒たるべし。

◎盡く書と信ぜば書無きより如す

孟子の語なり、盡中下篇の註に、程子曰、載レ事之辭、容レ有下重稱、而過ニ其實、者、上學者當レ識ニ其義、而已、苟執ニ於辭、則時或有レ害ニ於義、不レ如、無レ書之愈也、夫れ言句の道を得せしむるの筈蹄なり、故に言句の意を得て止む可し、苟も言句の端に拘泥する時の、徒よ道を得るの妨となるのみならず、動もすれば却りて道を害することあり、此の如くあれ、其言句の盡る無きに如かずと云ふことなり。

◎柱よ膠する

法規よ拘執せられて物の變化を知らざる喩なり。史記よ、藺相如曰く、王以名使、括(趙奢子趙括)若膠、柱而鼓、瑟耳、括徒能讀、其父書傳、不レ知レ合レ變也。成語考に曰く、變よ通する事を知らざるを徒に父の書を讀むと云ふ。書言故事に曰く、拘執不通曰膠、柱鼓瑟。

◎心を用ゆる鏡の如し

莊子の應帝篇より曰く、至一人之用、心若鏡、不將不迎、應而不藏、故能勝物、不傷。郭註に、物は監みて情無し、來れば即ち應ず、去れば即ち止む、神を勞するの累ひ無し、不將との已往に執着せざるを云ふ、不迎との未來を憂慮せざるを云ふ。

◎紅爐上一點の雪

續近思錄に曰く、顏子克己如紅爐上一點雪、言ふこゝろの顏回の己が私心より克ち去る事の速かなるの譬へ、紅に起りたる炭火の上へ一片の雪の降りかゝりたるが如き也、人欲を雪は喻へ、克己を紅爐は喻へたる也。

◎言語道斷

法華經より出づ、妙法を賞嘆したる詞よて、俗よ「ふにふに」と云ふことなり。朱子陸象山の事を稱して曰く、言語道斷、心思路絶」と云へり。維摩經の弟子品より曰く、法無名字、言語道斷。

◎辭達して已む

論語より曰く、辭達而已矣、註に詞の意を達して已むに取る、富麗を以て工と

爲さず、莊子の天道篇より、世之所貴、道者書也、書不、過、語、有、貴也、語之所貴者、意也、意有所隨、意之所隨者、不可、以、言、傳、也。

◎叩頭

頭を屈して地より叩くに至るの禮を云ふ。後漢の董宣傳より、帝怒召、宣欲、箠殺之、宣叩頭曰、願一言而死、云云。

器財雜具

◎孔方兄

成語考に曰く、曰孔方、曰家兄、俱爲錢號。晉書の魯褒傳に、褒著、錢神論、曰、親之如兄、字曰孔方、失之則貧、弱得之則富、昌無翼而飛、無足而走。

◎五金

金の黄金、銀の白金、銅の赤金、鐵の黒金、錫の青金、以上金銀銅鐵錫を五金と稱す。

◎五兵器

矛、戟、弓、劍、戈、以上を昔時用ゐる所の五兵器なり。

草木花實

◎五木 五果

桑。楮。榛。茶。以上を五木と云ふ。李。杏。棗。桃。栗。以上を五果と云ふ。

◎五穀

五穀は四説あり、其一は楚辞の註に據るゝ、稻、稷、麥、豆、麻とす。其二の孟子の註に、黍、稷、菽、麥、稻とす。其三は月令に、黍、稷、麻、麥、豆とす。其四の素問に、禾、麻、粟、麥、豆としたり。

禽獸蟲魚

◎金翅鳥

大鳥なり。長阿含經に、金翅鳥有、卵胎濕化、四生、大者縱横六十由旬、飛下海中、以翅捕水、水即而披深二百由旬、取龍食之。

◎五畜 五蟲

五畜といひ、鶏、羊、牛、馬、豕を云ひ。五蟲といひ、一曰鱗蟲、龍之が長たり、二曰羽蟲、鳳之が長たり、三曰毛蟲、麟之が長たり、四曰分蟲、龜之が長たり、五曰裸蟲、人之が長たり。

通用雜錄

◎崑山之下以玉抵鳥

物多きとき、其の貴はずと云ふ喩あり。劉子新論に曰く、崑山之下以玉抵鳥、彭蠡之濱以魚食犬。

◎巧僞ハ拙誠ヨ如シ

一好言の三冬暖かなり、一惡言の忽ち一心を惱すと云ふが如く、巧みなる僞言よりの、拙なる一言の誠實に如すと云ふ喩あり。說苑の説叢篇に曰く、